依とは天子の背後に立ちて威威を示すものなり　指とはこころばせなり意向なり　擧とはぐるなり　宇とは大なる心なり　伎とは動きなり　由とは自得喜悅の貌なり　比とは則方なり　氣とは萬物成生の氣なり

佐岐邪岐。加岐微流。伊蘇能佐岐淤知受。和加久佐能。都麻母多勢良米。阿波母與。賣邇斯阿禮婆。那遠岐豆。遠波那志。那遠岐豆。都麻波那斯。阿夜加岐能。布波夜賀斯多爾。牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾。多久夫須麻。佐夜具賀斯多爾。阿和由岐能。和加夜流牟泥遠。多久豆怒能。斯路岐多陀牟岐。曾陀多岐。多多岐麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳佐新麻岐。毛毛那賀邇。伊遠斯那世。登與美岐多豆麻都良世。如此歌即爲宇伎由比四字以音而字那賀氣理豆六字以音至今鎭坐也此謂之神語也。

須勢理毘賣大國主神に答ふる御歌

其嫡后須勢理毘賣命は、人性の善惡に就きて吉凶を作り重ね累ね陰陽剛柔仁義和合するの道を立てゝ、天子の背後に立ち武威を示せる意向を捧げ歌ひ曰く、天の機を伺ひ知る能力に富み加ふるに機微をも能くし、美にして登ることを許る神の教は、人宿を賀び泥富る恒久の理に近づき。古の罪人の析ことを許り曾ぬる神の教の遠方に邇てる世界各國の續く世を、老女は大なる心を以て機微をも知り、後世に流ふ斯道の續

る大國主神の御歌を聞こし召して須勢理毘賣の心大に解けたりしや今度は人性の善に吉慶を與へ惡に凶殃ならしむる道を開き猶其上に陰陽剛柔仁義共に和合するの道を立てゝ地上を主宰する神即ち大國主神の背後に立ちて威勢を成す趣きを述べ且つ歌ひ玉ふ天の運氣を伺ひ知る技術に富み且つどんな細かなことまで能く知りて世の中を美美しく仕上げることを考へつゝ人の宿ることを賀び常々昔の罪人の世の中に出づることを考へて世界各國を續かしめ

老練なる婦人は大きな心で小なことを知り後ちの世に流ふのであります大學者は世の中へ萬象の再び生まるゝ技態を助け往古より世の中を知り世の中を自分の物と受持ちて陰陽を和合し後世に遺し天の機を伺ひ知りて人氣を和し百性を下し世界萬有の各國を安んじ衆多の人都に生れ續きて良き世を成すと歌ひ終り須勢理毘賣命は自得喜悅の御容貌にて後ちの世の手本となり國を安んじ愷び萬物生成の理を修め玉ひしと云ふ今世に至るも現世界に御鎭座まし

くことを能く佐くる岐岐に加ふる岐は微を流き世界萬有の蘇る伎能を佐くる岐は淤の時より世を知り受け收めて陰陽を和し加ふるに久しく佐くる伎能を都に續け多勢を母ひ、良き人性の阿の神の敎を母ひ、後生に賣り與ふる理に邇づき斯く阿を禮どる老女は國を安んずること如是く人宿の天の機運を伺ひ、加ふるに岐の能伎の神の敎を布き天の運機を伺ひ賀び斯く夫を須く續かしめ、邇てる古き天の機を伺ひ賀び斯く多く爾たし衆多の恒久の夫を須く續き佐けて天の機を伺ひ寶を賀び斯く多く爾たしまして世の中の萬物を御育てなさるのであります。

阿を和するは知者能者に由る、天の機を伺ひ人氣に和し百性を下し遠く泥中に流き、衆多人に永久に則の勢力を能くせしめ、斯の智慧の道に多く陀き岐の百性を下し曾ね陀き多くの岐の衆多人の岐續きて國を安んじ賀ぶの理を續かしめ、多く續き傳へ佐け斯く續く岐は、桑麻五穀を生育し國を安んじ賀ぶ理に近づけば、世界萬有の斯く國を安んじ世は衆を成熟して美しき岐の衆多人續き都に良き世を歌ひ終へて其大なる動きは、自得喜悅の貌て後世の則方となり玉ひ、國を安んじて賀して萬物生成の理を修

胸とは情なり　形とは身體なり　奥とはかまどの神なり　津とは後學を濟度するなり　宮とは貴賤の住む所なり

められしと云ふ、今世に至るも御鎭坐ましまし
けん、是を神語と謂ふなり。

故此大國主神娶坐胸形奥津宮神多紀理
毘賣命生子阿遲二字以音鉏高日子根神次妹高
比賣命亦名下光比賣命此之阿遲鉏高日子
根神者今謂迦毛大御神者也。

大國主神多紀理比賣を娶り玉ふ

故に大國主神は心情身體を作り且つかまどの
神にして後世を濟ひ、貴賤の住む所に坐します
多紀理毘賣命を娶り生む所の御子は、阿遲鉏高
日子根神次に妹高比賣命亦の名は、下光比賣命

副話第五十八席　大國主神多紀理比賣を娶り玉ふ

前に申し上げましたるごとく須勢理比賣が御得心あらせられたるにより大國主神今度は人の身も心も出來て且つかまどをも司り後ちの世の貴きも賤しきも共に濟ふ神多紀理比賣を娶り生みます御子は阿遲鉏高日子根神其次は高比賣又の名は下光比賣命此阿遲鉏高日子根神は今は迦毛大御神と祭る

此阿遲鉏高日子根神は今は迦毛大御神と謂ふ
神なり。

大國主神亦娶神屋楯比賣命生子事代主
神亦娶八島牟遲能神自牟下三字以音之女鳥耳神生
子鳥鳴海神訓鳴云此神娶日名照額田毘道
男伊許知邇神田下毘又自伊上至通皆以音生子國忍富神此神
娶葦那陀迦神自那下三字以音亦名八河江比賣生子
速甕之多氣佐波夜遲奴美神自多下八字以音此神娶
天之甕主神之女前玉比賣生子甕主日子
神此神娶淤加美神之女比那良志毘賣此神名以音

のであります。

副話第五十九席　八島士奴美神より神

世十七代

八島士奴美神より遠津山岬帶神までを神世十七代と申します而して八島士奴美神より子孫順位に數へますと十五世でありまして十七世には二世不足の樣でありますが是れは大方大年神及び事代主神の如き兄神が世を持ち玉ひし事にはあり待るなんと思ひます而して十七世の中尤も顯著なる偉動

生子多比理岐志麻流美神此神名以音此神娶比比羅木之其花麻豆美神木上三字花下三字以音之女活玉前玉比賣神生子美呂浪神美呂二字以音此神娶敷山主神之女青沼馬沼押比賣生子布忍富烏鳴海神此神娶若晝女神生子天日腹大科度美神度美二字以音此神娶天狹霧神之女遠津待根神生子遠津山岬多良斯神。

右件自八島士奴美神以下遠津山岬帶神以前稱十七世神。

八嶋士奴美神より神世十七代

功績あるは大國主神なり故に今世に至るも出雲大社と齊き祭る所以であります。

出とは進なり、遠なり、見なり、生なり　雲とは山川陰陽の氣集るなり　御とはたざむなり　大とは乾元萬物資て始るなり　御とは理なり　前とは道なり　穂とは禾の總稱にて人を育つべきなり　波とは潤なり、潤ふるは神の歌へ

右に記せる八嶋士奴美神は速須佐之男命と櫛名田比賣との間に生れたる御子に在しまして、遠津山岬帶神まで十七代の神と稱へます、大國主神は其中間に顯れまして、大なる功績ある神なり。

故大國主神坐出雲之御大之御前時自波穂乘天之羅摩船而內剝鵝皮剝爲衣服有歸來神邇雖問其名不答且雖問所從之諸神皆白不知爾多邇且久白言自多字以音下四此者久延毘古必知之卽召久延毘古問

副話第六十席　大國主神少名毘古那神に助けらる

大國主神は世の中の總べての品物の形相を作る道理を作業する役目に在します時萬物の出來る大元より天の神德を率ゆること續々とし

時答白此者神産巣日神之御子少名毘古那神自毘下三字以音故爾白上於神産巣日御祖命者答告此者實我子也於子之中自我手俣久岐斯子也自久下三字以音故與汝葦原色許男命爲兄弟而作堅其國故自爾大穴牟遲與少名毘古那二柱神相並作堅此國然後者其少名毘古那神者度于常世國也故顯白其少名毘古那神所謂久延毘古者於今者山田之曾富騰者也此神者足雖不行盡知天下之事神也。

な羅とはつらなるなり摩とはみがきとぐなり鵝とは書の義にしては神敎なり皮とは生皮なり剝とはけづるなり内とは親族要妾までを云ふ不殘の義なり衣とは外部の掩ひなり服とはきものなり手とは百々の能伎を行ふものなり久とはひさしくさゝふるなり岐とはものしりなり斯とは久岐の二字を再呼するなり常とは恒なり久なり世國とは恒久の神理界を云或は外國の稱なり ふや不明

て舟の續ぐが如し此德行に打乘り神德の本髓を以て外部の粧りとし尋ね來る神あります其名を尋ぬれど云はず大國主神從へる供の神だちに問ひしかも皆知らずと申す其内獨り多邇具久神進み出でゝ申す樣久延毘古神は必ず其名を知つて居るでありませうと因て久延毘古神を呼びて問ひ玉へばあゝ此神ですか此神は神産巣日神の御子で少名毘古那と申す神でありますと申し上げければ今度は大國主神重ねて御祖の神彦巣日神にお尋になりましたすると神産巣日神は我が子の中でも尤も藝能に達して居るので長く世を持ち續くことの出來る子であると御答になりました猶且つ大國主神と兄弟となりて世の中の各國を作るべしと申されました其後ち少名毘古那の神は常世國とて外國へ渡られましたと申しますが此外國と云ふのは支那印度若しくは西洋各國を云ふのではなく神理界若しくは星の世國の如き國々を指すのであります而して少名毘古那神の名義を顯はしたる久延毘古神は今は山田の曾富騰と申します此

大國主神少名毘古那神に助けらる

元の大國主神、遠く進て衆多の生を見たまひ、山川陰陽の氣、集るを治められ萬物資て始まる、理ちを導き玉ふ時、神の敎の人を育つべき、元資の初德より天つそらの神德を麾き、連る船に乘り、神の敎の生皮を、殘らず鏟りて、外部の掩となし、寄來る神あり、其の名を問と雖も答ず、供の諸神に問ふと雖も皆知らずと申すゆゑ多邇具久の神、進み出で此の神は、久延毘古の神必ず知り玉ふならんと申したり因て久延毘古の神を招いて、問ひ玉ふ時、此の神は、神産

巣日神の御子、少名毘古那の神と白しき、大國主神は、神産巣日の御祖命に、申し上ぐれば、此の神は實に我が子なり、子の中でも、我が百々の能伎を行ふ所より出でし、世を久しく柱ふものしりの子なり、ゆゑに葦原の色許男神と、大國主神ノ一名兄弟となりて、其の萬物發生する國を作り固めよと、其の大國主神卽ち大名牟遲神と、少名毘古那の神と、地を柱ふる神相竝びて、萬物發生する國を作り固め玉ふと答へ申しき、後には其の少名毘古那の神は、外國へ渡り玉ひしなり、彼の少名毘古那の神をあらはせる、所謂久延毘古の神樣は足で歩くことなしと雖も世の中のこと知んと云ふことのない多智なる神樣であります。

海とは九曼八秋七戎六變之を四海と云ひ又た畔なり其の荒遠冥昧を取るの稱へとかや是れを以て究理すれば國荒の冥昧なるを海と云ふなり　光とはあきらかなり　倭とは歐の眞説なり神の教の眞相なり　青とは物の生るの色なり　垣とは人の阻み依る所なり　東とは陽氣動くなり　山とは產氣を散じ以て萬物を生ずるなり　上とは極尊の稱へあり

神は、今に山田の曾富騰と云ふ者なり、此の久延毘古の神は、歩行せずと雖も、天下の事、盡く知ろし召す、神德を有し玉ふ神なり、

於是大國主神愁而告吾獨何能得作此國孰神與吾能相作此國耶是時有光海依來之神其神言能治我前者吾能共與相作成若不然者國難成爾大國主神曰然者治奉之狀奈何答言吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上此者坐御諸山上神也。

大國主神三輪の大神に助けらる

副話第六十一席　大國主神三輪大神に助けらる

少名毘古那神常世國とて神理の鄕國か或は星の國へ行き玉ひしかば大國主神は大に慨嘆せられて噫如何にして此萬物生生として生ける國を作ることが出來るのだらうと其時荒れ荒みたる國を照らして寄り來る神あります其神言しけるは我が導

伊とはかれこれにて世界萬有なり
都とはうつくしくさかんなり
岐とはものしりつかへたてまつるなり
奉とは

こゝに大國主神、少名毘古那の神の常世の國へ度玉ふを愁て、吾獨り何ぞ能く此の萬物生成の國を作り得ん、孰れの神と此の萬物生成の國を、相作らんやと告り玉ふや、冥味なる萬物生成の國を、光らかにしてより來る神あり、其の神の言はく、我が導きを能く治め奉らば、吾能く汝と共に、萬物生成の國を作り成さんと、若し左樣でなければ、萬物生成の國成がたしと言ひき、大國主神其の治むる樣は、如何にと問ひ玉へば、吾は神の敎の眞相、卽ち物の生きて人阻み依る、陽氣動き萬物生ずるの極尊卽ち天神の、世界萬森羅萬象

き敎ゆる所を能く修業致さば吾汝と共に萬物生成の國を作るべしと然らずんば萬物發生の國は成難かるべし大國主神其修業する所を問ひ玉へば吾は神の敎の眞髓百物生きて人又生き元素なつて萬物生ずるの天の岐に仕へて事を成さうと思ふと答へ玉へり此神は三輪神社に祭りますとのことであります。

有の美き、盛なる識者に仕へ奉らんと答へ玉ひき、此の神は御諸山上に坐す神なり。

故其大年神娶二神活須毘神之女伊怒比賣一生子大國御魂神次韓神次曾富理神次向日神次聖神五神又娶二香用比賣一此神名・以レ音・生子大香山戸臣神次御年神二柱又娶二天知迦流美豆比賣一訓レ天如レ天亦自レ知下六字以レ音生子奥津日子神次奥津比賣命亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也次大山上咋神亦名山末之大主神此神者坐二近淡海國之日枝山一亦坐二葛野之松尾一

副話第六十二席　鳴鏑の事

此席では鳴鏑と云ふことを鳥渡一口御話し致します鳴鏑とは一種の矢でありますが矢に穴もあり羽もありて空中を通り行く時鳴聲の起る者でありますが建速須佐之男命大國主神の勇力を驗す時此矢を用ゐましたと云ふことでありますが其矢羽を鼠の子等が皆喫しとあれば羽には必ず毒のありたるなるを思ひ起すに足るでは

用鳴鏑神者也次庭津日神次阿須波神此神名以音次波比岐神此神名以音次香山戸臣神次羽山戸神次庭高津日神次大土神亦名土之御祖神九神上件大年神之子自大國御魂神以下大土神以前并十六神。

竈の神顯はる

大年神は建速須佐之男命の第五の御子に在しまして大年神の御子は都合十六神ありと申しますが中には竈を司る神もあり鳴鏑と云ふ毒矢を司るもありて共に人の生育を助け玉ふ。

ありませう故に鳴鏑を上欄で毒矢と書いたのは著者の自説で古説には曾て見ないのであります因に記します矢とは强健の德の稱へなり

羽山戸神娶大氣津比賣神自氣下四字以音生子若山咋神次若年神次妹若沙那賣神自沙下三字以音次彌豆麻岐神自彌下四字以音次夏高津日神亦名夏之賣神次秋毘賣神次久久年神久久二字以音次久久紀若室葛根神久久紀三字以音上件羽山戸神之子自若山咋神以下若室葛根神以前并八神。

相似たる大氣津比賣神

大氣津比賣神に付いては先に大宜津比賣又大氣都比賣神あるため古き學者の間にも其同神

副話第六十三席　相似たる大氣津比賣神

伊邪那美命の御子に大宜津比賣あり速須佐之男命の食を求めしは大氣都比賣なり今茲に大氣津比賣ありて羽山戸神と婚すと云ふに至り彼是相似て迷ひ易しされど大氣津比賣と書したる神の非ざれば同一の神に非ざること明なりましていはんや其靈は同一なりと雖も德已に別れたれば名も又別れたること疑ふべからざるものなり。

なりや異神なりやなど幾多の疑惑の横たはるあるを告げり大宜津比賣又大氣都比賣と大氣津比賣とは相似て異なる所あるなり。

天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穂國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命之所知國言因賜而天降也於是天忍穂耳命於天浮橋多多志而詔之豐葦原之千秋長五百秋之水穂國者伊多久佐夜藝呂有祁理告而更還上請于天照大御神爾高御產巢日神天照大御神之命

豐とは盛にみのるなり　秋とは物の熟するを以て秋となすなり　夜とは日入てのの後の稱なり　藝とは法製なり　有とはただすなり　祁とはおほいにのびやかなり　知とはつかさどるなり　振とはふるなり　振とは民を濟ふなり　媚とは親順なり　水とは萬物を任養するなり　穂とは禾の總稱なり

副話第六十四席　天使一度降る

古事記に於きまして說く所の神道は此席までは神の御思慮も御行爲も共に世界的なので大は日月星辰及び地球より小は諸物の元素の元始の微を極めた物ですが此席からは其作り玉へる國土を支配すべき神を定めて御遣しになるのですが我が日本國を支配すべき神は正勝

以於天安河之河原神集八百萬神集而思金神令思而詔此葦原中國者我御子之所知國言依所賜之國也故以爲於此國道速振荒振國神等之多在是使何神而將言趣爾思金神及八百萬神議白之天菩比神是可遣故遣天菩比神者乃媚附大國主神至于三年不復奏。

天使一度下る

天照大御神諸神を代表して、盛にみのり豐なる、葦芽の如く萌え出る、起りはじめの原の、無量

吾勝勝速日天之忍穂耳命と定め玉ひ是に添ふに天之菩卑能命天津日子根命を以てし玉へり又天つ神は海外諸國を支配すべき神をも御定めに相成つた事には相違なけれども古事記は日本國の系統紀と謂つても宜しい樣な物ですから日本國が世界各國と分離せざる時代は世界的に書し日本國が各國と分離の後は專ら日本國の事を記るされし者でありますされば讀者諸君も宜しく其心して讀れたし正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命將に日本國へ降り玉はんとして現

の物を熟し、長へに盛に、天地に滿つる萬物を任養し、五穀生育する國は日本國我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の、主どる國と、因に言げ玉ひて、耳命天降り玉ひき、こゝに天忍穗耳命、妖物界より現世界に達するの、人馬往來に便なる、神理即ち浮橋に、多く志して、詔り玉はく、豐葦原の千秋の、長五百秋之水穗の國即ち日本國多衆人久しく柱へて世を助くるの道は日入て法製ゆがみ曲りてあれば、是を正すにあり、大に延やかなる理みちなりと告ひて、更に高天原に還り上りて、天照大御神に、申上げ

（闇黑ニテ）

世界へ人畜の生れ來る道理を望み見ひ玉ふに日本國へ生れ來る道筋の荒が甚だしいので途中より還りて其趣きを天照大御神に申し上ゞすと天照大御神は高御彦巢日神の御指圖を仰ぎて八百萬神を自然的神の敎の大元に會合し思金神に思ひ謀らしめ天照大御神詔し玉ふ日本國は我が子の知るべき國なり然るに惡しき神の澤山居らるゝのは如何にして宜しきやと思金神及び八百萬相謀りて曰く天之菩比神は智の傑なり遣すべきなりと依て天之菩比神を

しかば、即ち高御產巢日神、天照大御神の命を以て、天つそらの戴きとほき、自然的神の敎の、その神の敎の原に、無數の諸神をあつめて、思金の神に思ひ斗らしめて、詔たまはく此の葦原かなめの國日本國は、我が御子の主どらん國と、詔り玉へる國なり、此の國を導き、速に敎ふべし、荒ぶる國の神どもの、夥多あるを思ふ、これは何れの神を遣はして、將に其の趣きを宣ぶべきやと、こゝに思金の神、及び八百萬神と相謀つて、天菩比能神を遣はすべしと、即ち天菩比能神を遣はせば、其神大國主神に、親順して遣しゝに三年に及んでも何の御返奏もありませんでした。

天とは人宿り纏くなり麻とは麻糸にして長く纏くなり迦とは遐遠なり古とは祖先なり弓とは剛健の德の出る本なり波とは波汲するを以て神の教とするなり矢とは剛健の德なり雉とは天子の氣色を云ふなり名とは命令なり鳴とは呼なり女とは陰道の者なり

三年に至るも、復へり奏せず、

是以高御産巣日神天照大御神亦問二諸神等一所レ遣二葦原中國一之天菩比神久不復奏一

亦使何神一之吉爾思金神答白可レ遣二天津國玉神之子天若日子一故爾以二天之麻迦古弓矢一而遣於

自麻下三字以レ音天之波波此二字以レ音矢賜二天若日子一而つかはしきおいて

是天若日子降二到其國一即娶二大國主神之女下照比賣一亦慮獲二其國一至レ于二八年一不レ復奏一

故爾天照大御神高御産巣日神亦問二諸神等一天若日子久不二復奏一又遣二曷神一以問

副話第六十五席　天使二度降る

天之菩比神が日本國へ使に參りて參年たつても歸らないので一向其用向が調ひません高御産巣日神天照大御神再び八百萬神に問ひ玉ふ何れの神をか遣はして宜しきやと思ひ金神が天若日子神を進めしかば之に天之麻迦古弓と申して人々此世に宿り續く所の祖先等が相會合する德の本と人々此世に宿りて神聖なる神の敎へを普及する剛健の德とを授け玉

天若日子之淹留所由一於是諸神及思金神答白可レ遣二雉名鳴女一時詔二之汝行問二天若日子一狀者汝所以使二葦原中國一者言趣一和其國之荒振神等之者一也何至レ于二八年一不二復奏一

天使二度降る

こゝを以て高御産巣日神、天照大御神亦た諸の神だちに問ひ玉はく、葦原の中つ國日本に遣はせる、天菩比神、久しく復へり奏せず、又何れの神を遣はして宜しきやと、そこで天つそらの、

ふ然るに天若日子は日本國へ降りて大國主神の女婚となり且又其大國主神の支配し來れる日本國を奪ひ取らんとする心ありて八年に至るも歸らされば使命又調はず依て高御産巣日神及び天照大御神は八百萬神に問ひ玉ふ此度は何れの神を遣して宜しきやと諸神並に思金神答へ申す雉名鳴女を遣すべし雉名鳴女と云ふ者は外粧五色を章り採色美麗にして區分が明かなので易敎では文明と稱へて居ります又五色を天子の氣色と成すのですが天子の氣色を佩ふる

人やどを養つ、葦かびの初徳の、人宿り續く邂（ヒトノハジメヲツヅルモツトモハジメノトクノ）
逅の祖先の弓と、天つそらの神の、教の其の神（出ル本）（尤モ神聖ナル）
の敎の、矢を以つて、天若日子に賜ふ、こゝに（剛健ノ德）
天若日子、葦原の中國（本日）に降り、卽ち大國主神
の女、下照比賣を娶り、また其の葦原の中國を、
奪ひ獲んと思ひ、八年に至るも、復へり奏せず
こゝに天照大御神、高御產巢日神、また諸の神
だちに問ひ玉はく、天若日子久しく復へり奏せ
ず、何れの神を遣はして、以て天若日子の、滯
り止まる故を問はしむるやと、こゝに思金の神、
答へ申さく、雉名鳴女を遣はすべしと、時に雉（天命ヲ呼フ陰者）

者は卽ち天使なりと謂ふ所から雉を形容して天使となし命令を呼び傳ふる陰道の者を名鳴女と申します今此天子の氣色を佩びて陰に命令を傳ふる雉名鳴女に詔し玉ふ汝行きて天若日子神を詰問するに天照大御神弓矢の德を授け玉ひしは言葉にて惡しき神たちを平げよとのことなりと云ふを以てすべしと。

湯津楓（しきたとは惡拂ひ後學を濟度し雜に會て正色顯はるるの木なり）楓（とは其葉霜を得て丹色なり是れ幾種の雜艱を經て始めて正色顯はるゝ意なり）天之波士弓（とは波は普く及ぼすなり士はあきらかに事に任ずるの稱にして普く及ぼし明かに事を成すの弓）

名鳴女（ヲ呼フ陰者）に詔り玉はく、汝行て天若日子に問ふ狀は、天若子が葦原の中國の、荒振神たちを、言葉を以て、趣かに和げよとなり、何ぜに八年に至るも復へり奏せざるや、弓矢を賜ふと雖も、其實言葉を以て、趣かに和げよと言へるなりと。

故爾鳴女自天降到居天若日子之門湯津楓上而言委曲如天神之詔命爾天佐貝賣（此三字以音）聞此鳥言而語天若日子言此鳥者其鳴音甚惡故可射殺云進卽天若日子持天神所賜天之波士弓天之加久矢射殺其雉

副話第六十六席　惡を罰すること始まる

天子の裝束をなし天の命令を陰に傳ふる雉名鳴女は天若日子の門口に至り百難に會ふて本色を顯す木の上に止まり天つ神の詔命を告げ

なり

天之加久矢とは加はまする〳〵なり久は久しくささふなり故に益々久しく柱ふるの矢なり　麻賀禮とは麻糸の如く續き賀陪の禮を以て異姓の國を親むなり　胡床とはいのち長き床かなり　坂とは蒲坂身熱の坂蒲は姓にして人と生る所以なり故に坂は人と生るの坂なり身を熱むの坂なり

爾其矢自雉胸通而逆射上逮坐天安河之河原天照大御神高木神之御所是高木神者高御產巢日神之別名故高木神取其矢見者血著其矢羽於是高木神告之此矢者所賜天若日子之矢卽示諸神等詔者或天若日子不誤命爲射惡神之矢之至者不中天若日子或有邪心者天若日子於此矢麻賀禮此三字以音云而取其矢自其矢穴衝返下者中天若日子寢胡床之高胸坂以死此還矢可恐之本也亦其雉不還故於今諺曰雉之頓使本是也。

惡を罰するの始め

故にこゝに雉名鳴女、天より降り至り、天若日子の門口なる、惡しきを拂ふて、後學者を濟度する、百の艱難を經て、正色を顯はすの木の上に居て、曲に天つ神の詔命を、言げ玉ひき、そこで天佐貝賣神、此の鳥の言葉を聞き、天若日子に言ふ、此鳥の鳴く聲甚だ惡し、故に射殺すべしと云ひ進むれば、卽ち天若日子は、天神の賜へる天つそらの、普く及ぼし明らかに事を成たりしかば天若日子其鳴聲を怪しとなし天之波士弓で天之加久矢を放ち雉名鳴女を射殺したり其天之加久矢は雉の胸を通りて遠く上天に達したり人々の生れ來る大元を知しめす天照大御神及び高木神其矢を見て申さるゝには此矢は天若日子に與へたる矢なり天若日子惡しき神を射たりし矢なれば天若日子に中らじ邪なる心あらば此矢に隨ひて思ひ變りし者となれと詔りして其矢を衝き返し玉ひしかば天若日子が欲心滿々として寢ね人を生み身を熱むることを思ふ所に中りて天若日子は死したりけり此矢の流通の理は古今の世に瀰漫して行き渡らざる所なく或は神明の德となり或は神罰とはなるので人々恐懼する所以なり雉も又歸らず今に雉の頓使と云ふ言葉が殘つて居るのであります。

の弓と、益々久しく世を柱ふる矢を持ちて、其雉を射殺したり、其矢雉の胸より通りて、逆に射上り、天安河の河原に坐す、天照大御神高木神の御所に逮りき、卽ち高木神其矢を取り上げ見玉へば、其矢羽に血著たり、卽ち高本神此矢は天若日子に、賜へる矢なりと告り玉ひて、諸神たちに示し詔り玉はく、天若日子天照大御神の命令を誤たずして、惡ぶる神を射たりし矢なれば、此の矢は天若日子に中らず、或は邪心ありしなれば、天若日子此矢に麻糸の如く、續き從ひ賀慶の禮を以て異姓の國を親めと詔り玉

（剛健ノ德本）（剛健ノ德）（人宿リ纏ク自然的ノ神道ノ大元ニアル）（ヨロコンデココロヲアラタメヨト）

ひて、其の矢を取りて其の矢穴より衝き返し玉ひしかば、天若日子が命長き床に寢たる、貴ぶ胸の人と生れ身を熱むるの、場所に中りて、天若日子死えたり、此矢は神明を明にし、惡を罪するの始めなり、此理永く後世に傳はれるなり、亦其雉還らず、故に今に諺に雉の頓使と云ふもの、本は是れより起りたるなり。

（長ク死セスト思ヒタル）（思）

故天若日子之妻下照比賣之哭聲與風響到天於是在天天若日子之父天津國玉神及其妻子聞而降來哭悲乃於其處作喪屋

河鴈（とは繒を荷ふて分布し再偶せざるを云ふなり）岐佐理持（とは岐を佐げて理を持するなり）鷺（とは其形ち清白を云ふなり）掃持

副話第六十七席　葬儀の式始まる

天若日子が矢に當りて死たりしかば其妻下照比賣大に哭き號びたり其聲上天なる

翠とは掃除するなり　雀鳥とは鳴なり　雉とは踊る淫者なり　女とは陰道なり　八とは極なり　遊とは行ひ遊ぶなり

而河鴈爲二岐佐理持一（音岐下三字以音）驚爲二掃持一翠鳥爲二御食人一雀爲二雉女一雉爲二哭女一如此行定而日八日夜八夜以遊也。

葬儀の式始まる

故に天若日子の妻下照比賣の哭聲風と與に響て天に到る是に於て天に居ませる天若比子の父天津國玉神及び其妻子聞きて降り來り哭き悲み乃ち其處に喪屋を作り精を荷ふて分布し再偶せず岐を佐け節理を持し其形清白に雌は食を御る者となし踊れる淫者を堆き陰道として理を示された者と思ひます。

天若日子の親族に及ぶ父母是を聞きて悲しみ來り下りて天若日子の所に至り喪屋を作る清廉潔白にして再偶せざる河鴈を岐の節理を持する德者となし其羽毛清白なる鷺を掃除の役となし雌鳥を食事を御る者となしさがしき雀を惡者の使とし雉を天子の悲しき使となし如是役を定め式を行なつたのが葬式の始めであります此式は鳥の精神と羽毛とに依りて各其役取りを致しました者であります。因に記します此の時未だ鳥の形ちはないのですが只形容を以

切とは要なり　足とは容儀の藻なり　蹶とは動なり　離とは是を離れ彼に就くなり　藍とは鑑に通す　美とはいつくしみなり　濃とはこまやかなり　國とは鄕なり

王使を悲しき陰道をなし如是く行ひを定め極りなく永遠に以て行ふなり。

此時阿遲志貴高日子根神（自阿下四字以音）到而弔天若日子之喪時自天降到天若日子之父亦其妻皆哭云我子者不死有祁理（此二字以音下效此）我君者不死坐祁理云取懸手足而哭悲也其過所以者此二柱神之容姿甚能相似故是以過也於是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故弔來耳何吾比穢死人云而拔所御佩之十掬劒切伏其喪屋以足蹶離遣此

副話第六十八席　喪屋を拂ひ官位を失ふ順序を定む

前席に於て速べましたる通り夫々の鳥を集めて葬儀の式を作し長く遊び居たるに阿遲志貴高日子根神天より來りて吊ひたれば天若日子の父母は其容ち相似たるを以て阿遲志貴高日子根神を天若日子となしたりしかば阿遲志貴高日子根神死人と等しと成すと申して怒り玉

者在二美濃國藍見河之河上一喪山之者也其持所切大刀名謂二大量一亦名謂二神度劍一度字以音

喪屋を拂ひ官位を失ふ順序を定む

葬儀の式將に終らんとする時阿遲志貴高日子根神來りて天若日子の喪を吊ふ曩に降り來れる天若日子の父母哭て云ふ我が子は死なずしてありけり我が君は死なずして坐しけりと云ひて手足に取懸りて哭き悲めり其過てる由は此二柱の神の容姿甚だ能く相似たり此故を以て過てるなり是に於て阿遲志貴高日子根神大ひ其喪屋をば罪に處し德行を以て喪屋を動かし悲哀の境偶を離れしめ玉ひ天若日子が天命を帶びて出雲に下れる官位を失ふ順序に離かしめ美しみ濃厚なる故郷を思ひ起して神の敎の神聖なる其上にも猶神聖なる法則に依りて位を失ふ順序を定むる者であります其持ち玉へる大刀を大量と申すのでありますが大量とは大に時や月に協ふて日を正し度量衡を同律にすると申して世を改むるの心であります亦の名を神度劍と申しまして神は顯はに照すなり度は人

に怒り曰はく我愛ふ友なるが故に來り吊ふのみ何ぞ吾を穢き死人に比ぶと云ひて其佩ぶる所の地上を整理する劍を以て喪屋に近く迫つて罪に伏せしめ德を容るの藻を以て喪屋を動し悲を離れて失位の序に離かしめ美しみ濃かなる古鄕を鑑み見る神の敎の其上に在つて失位の順序を定むる者なり其持てる大刀の名を大量と謂ひ亦の名は神度劍と謂ふなり。

故阿治志貴高日子根神者忿而飛去之時其伊呂妹高比賣命思顯二其御名一故歌曰阿米を濟ふなり劍は國を治むるなり即ち神度劍とは陽はに世を照し人を濟ひ國を治むと云ふ義であります。

副話第六十九席　高比賣の御歌

阿遲志貴高日子根神は已に

那流夜。游登多那婆多能。宇那賀世流。多麻能美須麻流。美須麻流邇。阿那陀麻波夜美多邇。布多和多良須。阿治志貴多迦比古、泥能。迦微曾也。此歌者夷振也。

高比賣の御歌

故に阿遲志貴高日子根神は忿りて飛去るの時陰道を總べる妹高比賣命其名を顯さんと欲し歌ふて曰く人宿を續かして國を安んじ流へ天の機を伺ひ泥の時より登り多く衆多の國を安んずる男子の老者の多能は宇宙の國々を安ん

天若日子の喪屋を取りのけて世の中を平日に復せしめ國を治めて飛去るの時其背後に立てる高比賣命阿遲志貴高日子根神の御名を顯さんと欲し歌よみ玉へり人々の此世に宿り生まるゝことを續かして國々を安樂に流へ天の動機を伺ふて世界成立の時より登り多き澤山なる國々を安樂にする男子の老練なる伎能は宇宙間の國々を安んじ賀んで世に流へ多くの人々に能伎を教へて美なるらしめ國を成す方法に近づきて神の教の好時節を伺ひ世の中を治むる志の

じ賀して世を流へ衆多人を續かしめ能伎を美にし須らく續き流へ美を須ぬ續き流へ近つきて人宿の國を安すきに陀むき續けるの神の教の機を伺び美なる衆多人に近づいて布ける衆多人を和し衆多人を良きに須ゐ人宿を治むる志の貴き衆多人を邂逅す則方の初泥の時より伎能邂逅の妙微を曾ね終ふと歌ふ此歌は夷振なり。

於是天照大御神詔之亦遣曷神者吉爾思金神及諸神白之坐天安河河上之天石屋

貴き多くの人々と邂逅して物の初めの時より藝術を成すの妙微を演べ行ふと歌ひ玉ひしなり。

副話第七十席　天使四度降る

前席に於て申し上まつしたる

名伊都之尾羽張神是可遣（伊都二字以音）若亦非此神者其神之子建御雷之男神此應遣且其天尾羽張神者逆塞上天安河之水而塞道居故他神不得行故別遣天迦久神可問故爾使天迦久神問天尾羽張神之時答白恐之仕奉然於此道者僕子建御雷神可遣乃貢進爾天鳥船神副建御雷神而遣。

天使四度び降る

こゝに天照大御神、これに詔り玉はく、亦曷の神を遣はして吉からんと、そこで思金の神及び諸〳〵の神白し上げ玉ふ、天つそらの自然的神の教（至極神聖ナル）の其神の教の、其上の人やどり續く、數千萬億の人生靈の、潜するのへやに坐す、御名は伊都之尾羽張神、是の神を遣はすべしと、亦此神にあらずば其神の御子建御雷之神を遣はすべしと、且つ其伊都之尾羽張神は、天つそらの神の教の、萬物の出來る元を逆塞に塞ぎ上げて、萬物生成の道を塞ぎ居る故に、他の神は葦原の中國へ、行く事が出來ない、左あれば、別に天迦久神を遣はして、伊都之尾羽神に問ふ時、恐れながら仕へ奉らんと答へ白しき、左樣なれど此通り天菩比神天若日子及び雉名鳴女と三度御使を降して水穂國を平げしめ玉ふと雖も天地和合の理其宜しきを得ないので平和の風は更に聞くことが出來なかつた天に在しまして待に待たせる天照大御神は諸神と相議し伊都之尾羽張神を使すべしとなし今度は十分の協議を凝らし十分の仕度をなしたる後ち建御雷神に天鳥船神を副へて御使はしに相成りました。

道には、僕が子建御雷神遣はすべしと、乃ち建御雷神を進め貢てまつりき、そこて天鳥船神を建御雷神の副として、葦原の中國へ遣はしけり。

是以此二柱降到出雲國伊那佐之小濱而拔十掬劍逆刺立于浪穗跌坐其劍前問其大國主神言天照大御神高木神之命以問使之汝之宇志波祁流國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何爾答白之僕者不得白我子八重言代主神是可白然爲鳥遊取魚而往御大之前未

伊那佐三字以音

浪とは陽なり意明なり　穗とは人を育つべき元始の德なり　刺とは貴むなり　劍とは洲をさしはさむなり　前とはみちびきなり　跌とはほしいまゝなり　祈とは求むなり　流とはのばしつたへろなり　立とは陰陽剛柔仁義和合の道を立つるなり　逆とは迎かふなり　青とは生る色なり　柴とは布斯にしてこれ御大御前をおさめ乾元萬物の資て始まるすぢみちのみちびきなり

副話第七十一席　大國主神眞洲を日神に獻ず並に魚鳥の形顯る

抑も大國主神の作り玉へる國統御し玉ふ處は廣大無邊なもので地球の表面全部は勿論其他にもあるかどうかと思ひます而して大國主神の住し玉ふ所を出雲國と申しますが此出雲と申しますのは現今の山陰道の出雲國を云ふのではなく何處でも地氣昇りて人畜草木等の成り出る場所を出雲と云ひ又其人を作り出し玉ふ大御心を出雲と申すのであります伊那佐之小濱とは世界を佐くる小なる水岸と云ふので此處が日本國であり又今の出雲國であつたかどうかは往古の事で判然と分りません兎角日本國内ではありますす大國主神は世界のあらゆる生物を作り玉ふのが御本意で其作り上げたる人類などを統御なさるゝは御本意でありませんから何となく

還來故爾遣天鳥船神徵來八重事代主神而問賜之時語其父大神言恐之此國者立奉天神之御子卽蹈傾其船而天逆手矣於青柴垣打成而隱也。

布斯

大國主神眞洲を日神に獻ず並に魚鳥の形顯る

こゝを以て、此建御雷神、天鳥船神の二神、山川陰陽の氣集まり、遠く進て生を見るの國、世界萬有國を安んじ助くる、小なる水岸に降り、天地に充てる劍を陽はに掬り、意明かに、人の

地氣立チアガリ　深ク神ノ業ヲ行フテ今生ルヽトコロ　日本國　アラユル

育つ元始の德に迎け責め立て、其の洲を挿む導きに恣にすはり居て、大國主神に問ひ言はく、天照大御神高木神之命、われを使はし、問ふ故は汝の大なる志し、神の敎の福を求めのばし傳ふる、葦原の中國（日本國）は、我が子の主どらん國と言よさし賜へり、故に汝の心奈如んと問ふ時に、答へ白さく僕は白し得ず、我が子八重事代主神是れ白すべしと、然れども鳥遊び魚取りに、乾元萬物の資て始まる理の導きに、往て未だ歸へり來らず、そこで天鳥船神を遣はして、八重事代主神を徵し來て、之れに問ひ賜ふ時に、其の

（洲）とは水中居るべきを洲と云ふなり

國が治りませんのを天に在します天照大御神是を見兼て我が子孫をして知らしむべしとなし數回御使を下し玉へる所以なり又大國主神の司り玉ふ所とは方面が違ひますから二言なく獻上致しました事であります其子の八重事代主神も矢張り大國主神の御子でありますから魚や鳥の形を作るのが御本意で國を治むると云ふことは本意でないから直ぐに獻上致した譯であります猶其船を踵み傾け天の迎手を生ける者の色に布くとは我が居所を傾けて天の命を

科（とがとは罪貴なり）野（とはのばらの廣遠なる處なり）

洲（とは水中居るべきを洲と云ふなり）羽（とは羽の數四十八水に屬するものを以て最清物の象となす是れ科罪の水にひたすこと久しればけ轉じて最清物を作ると云ふ義り）

父大神に云ふ、恐れおほし此の國をば、天神の御子に奉らんと、そこで其の遣ひ船を踵みかたむけて、天の迎手を生けるもの〻色に布き、これを垣に打成して身を隱し玉ひき。

故爾問其大國主神令汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白之亦我子有建御名方神除此者無也如此白之間其建御名方神千引石擎手末而來言誰來我國而忍忍如此物言然欲爲力競故我先欲取其御手故令取其御手者卽取成立受け生物を作ると申すことであります。

副話第七十二席　惡を罰すること始まる

前席に於て申し上げたる通り大國主神及び其子八重事代主神も皆其天神の授け玉へる職務を知り玉ふが故に天照大御神の御使建御雷神の命に隨ひ日本國永世統治の權を獻りしかも其弟

氷に亦取成劔刃故爾懼而退居爾欲取其建御名方神之手乞歸而取者如取若葦捻批而投離者卽逃去故追往而迫到科野國之洲羽海將殺時建御名方神白恐莫殺我除此地者不行他處亦不違我父大國主神之命不違八重事代主神之言此葦原中國者隨天神御子之命獻。

惡を罪すること始まる

建御雷神こゝに其の大國主神に問ひ玉はく、今汝の子事代主神如是く申しぬ、また申すべき子

建御名方神愚にして覺らず已の手腕に叶ふだけの重き障害物を持來りて曰く力競べをなさんと建御雷神之に應じ力競べを成し玉ふに建御名方神大に敗北し逃げて罪に伏したり且つ曰く父大國主神兄八重事代主神に隨ひ日本國の統治權を天照大御神の御子に獻りますと申されました。

ありやと、こゝに又申さく我が子建御名方神あり、是れを除きてはなきなり、如此申すの間に、建御名方神、多數のみちびき樂みの聲の揚らざるものを、手の末に、擎げ來て言ふ、誰が我が國に來て忍び忍びにかくもの云ふ、さらば力競べせんと、建御名方神、先づ建御雷神の手を取れば、卽ち氷に取立成し、亦劔刃に取立成し、建御名方神恐れて退き居り、こゝに建御雷神、建御名方神の手を取らんとすれば、若葦を取るが如し、掴みひしぎて、投げはなては、卽ち逃げ去りぬ、建御雷神追ひ往きて、罪責の廣遠な

るふるざとの、水中に居るべく、罪科の水にひたす事久しければ、轉じて最清物を作るの、天地に追ひ到りまして、將に殺さんとするの時、建御名方神白さく、我をめぐらすなかれ、此の罪科の處をおきて、他處へは行かず亦我が父大國主神の命に違はず、八重事代主神の言葉に違はず、此の葦原のかなめの國は、天神の御子の命に隨ひ獻らんと。

ナルヒロキノハラ

所

故更且還來問二其大國主神一汝子等事代主神建御名方神二神者隨二天神御子之命一勿レ違白訖故汝心奈何爾答二白之一僕子等二神

登とは衆なり成なり熟なり衆に進むを登と云ふなり　海とはおほいなり事物の集りたるところなり　巣とは棲すみか又は往來する親なり

副話第七十三席　百官隨從の理始まる

天より降り玉へる建御雷神は更に大國主神に問ひ玉ふ御子は二神とも皆天津神

隨レ白僕之不レ違此葦原中國者隨レ命既獻也唯僕住所者如二天神御子之天津日繼一所レ知之登陀海此三字以音下效レ此天之御巣而於二底津石根一宮柱布斗斯理此四字以レ音於二高天原一氷木多迦斯理多迦斯理四字以レ音而治賜者僕者於百不レ足八十坰手隱而侍亦僕子等百八十神者即八重事代主神爲二神之御尾前一而仕奉者違神者非也如此之白。

百官隨從の理始まる

ゆへに更に還へり來て大國主神に、汝の子等事の命に違はずと申しますが汝の心は如何なりやと申しければ私も違ひませんと申し上げ且つ曰く私の住む所をば天照大御神の御子の天津神の德を繼ぎて知り玉ふ所の澤山の人々を生み成して大に集まる世の人の棲家の如くにして奥ゆかしく津ひつゝ堅き氣力で世を杜へ人を布こし人々此世に宿り來れることを熱心して其道を治め賜はゞ私しは世の中にあらゆる者共を率ゐて及ばずながら職務に勉強し外野に隱れ身となり仕へ奉り亦我子八重事代主神等は顯

百とは衆多易經に百官以て治まる書經に百性を平章す後漢書に百轡職を貫す皆勉力して之れを成すと云ふなり　足とは滿なり　坰とは郊野又たは郊外郊とは邑の外と云ふなり　隱とはかげしの盛なる貌なり　尾とは生なり　木とは土を冒して生する萬物生成の道を云ふなり

代主神建御名方神二柱者、天神の御子の命に隨ひて違はずと白したり、汝の心奈何と問ひ玉へば、答て申さく僕が子等二神白し付に隨ふ僕も違はすと、この葦原の中國は天神の命に隨ひ、既に獻らんと、唯僕が住かをば、天つ神の御子の人を育て、後學者を濟度し、後々を主どり、衆多を成熟して業に進み、大に、人やど續く御世間ノ棲かの如くして、後世に下り至り後學者を濟度し星羅し、物事の原氣に妻子を主どり、兵勢のナツテイキホイヨキこのすぢみち高天原に凝り、萬物出るの道、衆タツトキヲコナイ世ノ始メニ熱心ニシテ多人の葦かびの初德を、此の理に治め賜はゞ、はに百官百姓の多くの神々を從へて天津神の御子の前後左右に仕へ奉りなば又背く神はありますまいと申上げました。

僕は百官百姓百蠻を率ゐ、皆勉力して職を勉め、滿ずとも幾多の郊手に、隱れしのびて侍らんと、亦八重事代主神を始め、我子等百官百姓の、幾多の神は天つ神の御子の、御後へ又は御前きとなりて、仕へ奉らば違ふ神は非らざるなりと、斯の如く白しき。

而於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍

多藝志三字以音

御饗之時禱白而櫛八玉神爲膳夫獻天咋出底之波邇此二字以音作天八十毘良迦此三字以音而

藝とはわざの極度なり　禱とは天に告げ地に祈りもとむるなり　海とは天地なり又た晦にして陰陽風雨晦明の理なり　底とは樞密院なり　邇とは遠を和げ近きを能くし又た父母孔遍孔は鑑音

副話第七十四席　建御雷神復命す

地氣昇りて諸物質形を成し神は諸藝を演出し玉ふ好時機となりしかば水陸近き處に天道を統べさせ玉ふ館を

な　**毘**とは明地厚り　なり、輔也

迦とは父母を迎へ迦逼するなり

作とは新に民なるなり　**布**とはつらを成すなり

柄とは櫂ほい　**鎌**とは刈鉤なり　とはかくしと　**蕚**とは清叢なり叢生するを蕚と云ふなり　むるなり

登とは衆を成熟して業に進むなり　**巣**とはしめなり

新とは自ら息み子を宵つるの理を云ふなり

拳とは權手なり又愛なり、勤懇なり恭なり又た之を奉持するの貌一拳を得て拳眼瞥して失はざるなり

垂とは黄帝堯舜衣裳を垂れ天下治まるなり　**摩**とは研なり、陰陽相摩す相觀て善し之れを摩と云ふなり

燒とは野火なり

鎌海布之柄作燧臼以海蕚之柄作燧杵而鑽出火云是我所燧火者於高天原者神産巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟訓凝烟云州須之八拳垂摩弖燒擧摩弖二字以音地下者於底津石根燒凝而栲縄之千尋縄打延爲釣海人之大口之尾翼鱸訓鱸云須受岐佐和佐和邇此五字以音控依騰而打竹之登遠遠登遠邇此七字以音獻天之眞魚咋也故建御雷神返參上復奏言向和平葦原中國之狀

建御雷神の復命

作う櫛八玉神食事の司となり天道によりて成せる總べての饗應を神に奉る時天に告げ地に祈り身を謹みて申す鵜の水中を潜るが如く變化神通して天地の間の眞の奥間に至り最大秘微の神の教の德音を見出し大に力を盡して遠く神道に進み萬衆の生まるることを見て天の高明なる良き父を迎ふとなし新に民を作り國を成し天地に蔓る威勢を物の成り出る土臺とし天地に充てる威勢を物の成り出る本元となし遠く神道に進みて萬物の生ずる道を見陽氣を用ゐて

擧とはひつさく牲を殺して饌に盛るもの　**栲**とはやまあふちなり皮厚く車輪を作るべくなり

縄とはかりたゞし、なほすなり

釣とは昔し堯舜禹湯の釣るや聖堅を以て竿となし道德を以て綸となし仁義を鉤となし礫刺を餌とす四海を池となし萬民を魚とするなり　**大**とは大初なり　**口**とは象形なり

尾とは交接を云ひ物の生育に困て事氣の和を驗する云ふなり

翼とは美なり和なり、盛なり、元氣なり、翅なり、助なり　**竹**とは人の姓なり　**遠**とは永遠なり

魚とは吾れに同しきなり

出雲の多藝志の小濱に、天つそら統させ玉ふ館を作りて、水戸神孫櫛八玉神、食を具ふる丈夫となり、天つそらの統ての饗を奉る時に、天に告げ地に祈り白して、櫛八玉神鵜の水中をくゞるが如く、變化神通して、天地の樞密院に入り、樞密院の神の教の、父母の德音を大聲に呼び、遠く進で生を見ひ、天つそらの幾多の明厚なる、良き父を迎へ新に民を成す、天地に連なる權を、燧臼に作り、天地叢生の權を、燧杵に作り、遠進發生ノ元んで萬物の生を見るの火を鑽り出して云はく、是れ我燧れる火は、高天原は神産巣日神、御祖作レル陽氣ヲ用ヰテ萬物ヲ變化スルハ陽氣ヲ用ヰテ萬物ヲ變化シ

萬物を化成す我れの仕業は高天原の神産巣日神の御處業を行なつて天の道を治むるものなり猶子を育つる國は是非恭愛勤懇の道義を服膺して帝德を垂れ道を研きて世の中を治め表裏相應じて不善を攻め堅固に改め直す繩を延ばして萬民を集め其の氣風を見て世の中の人を育て美なる風氣を見て智識を增し諸物を和合して人民を助け天下の達道たる父母の德に叶はせ多くの人を作る業に進み永世の間衆人を作る業を成し父母の德即ち天の誠を吾盡し奉らんと

命、衆を成熟して業に進む、神の教をのばし傳へ、天つそらを治め自ら息み、子を育つるの國は、須く概りなき、恭愛勤懇を服膺して、帝德を垂れ天下を治め道を研き迫まりて、陰陽相摩して善なるものを、野火(不生ノ理ヲセンジツメテ)で燒き擧て栲の皮にて捲きたる如く、繩り直す、長き繩を打ち延ばし、萬民を釣り、天地(世ノ中)の人の生育に因て、其氣の和を驗す、美なる盛氣を須く受けて智を助け、百藥相和し萬民を助け、天下の達道父母の德音に、控き寄せ騰げて、人生の衆盛熟し(生育)業に進み、永遠に、永遠に衆を成熟し、業に進み永遠に永遠大聲に呼び上げましたので建御雷神は漸く天に復命することが出來ました。

に、父母の德音の天つそらの誠を、吾れ大聲にて奉らんと、そこで建御雷の神返へり參り上りて、葦原の中國を言ばにて、和げ平げし狀を奏し玉ひき。

爾天照大御神高木神之命以詔太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命今平訖葦原中國之白故隨言依賜降坐而知看爾其太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命答白僕者將降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志(自邇至志以音)天津日高日子番能邇邇藝命此子應降也

副話第七十五席　天孫降臨の事定まる

前席に於て申し上げましたるごとく大國主神八重事代主神櫛八玉神などが辛苦照慮して天地の道によりて萬物成り出る道を開きたりしかば今は作り上げたる諸物を統御すべき神を迎へんと思ふ折しも建御雷神天の使

此御子者御合高木神之女萬幡豐秋津師比賣命生子天火明命次日子番能邇邇藝命二柱也是以隨白之科詔日子番能邇邇藝命此豐葦原水穗國者汝將知國言依賜故隨命以可天降。

天孫降臨の事定まる

こゝに天照大御神、高木神の命を以て、太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔玉はく、今葦原の中國を平げ訖へぬと白しき、言を以て助け賜へるに隨ひ降りまして知ろしめせと詔玉ひき、こゝに其の太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命、答へ白さく、僕は將に降んとして、裝束するの間に、子生れ出つ名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子蕃能邇邇藝命、此子降すべきなり、此御子は天忍穗耳命高木神の女萬幡豐秋津師比賣命に、御合まして生める御子は、天火明命、次に日子番能邇邇藝命、二柱なり、即ち日子番能邇々藝命を科詔きて、此豐葦原水穗國者、汝發に知し召さん國と言葉で助け賜ふ、彼れ日子番能邇々藝命、天照大御神高木神之命に隨ひ、天より降り賜ひしなり

として降り給ひ其出來上りし國を天照大御神の御子に獻れと申されしかば喜んで獻上する趣きを申し上げしなんさんぬるほどに建御雷神其由申上げしかば天照大御神其子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命を降し賜はんとしたるに其子天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命顯れましたるにより此御方を日本國統治の爲め御降しに相成義御決定に相成ました。

衢とは四達の道なり　**伊牟**とはかれこれにて萬有なり　**迦**とは百性を下すなり　**布**とは父母を迎へまつりつらぬなり　**面**とはほしまつりつらぬなり　**勝**とは堪なり任なり、擧なり、天道爭はす善勝なり　**伊牟迦布神**とは萬有の百姓を下し父母を迎へあいほしまつりつらぬ神なり　**面勝神**とは擧て任に堪ゆる天道爭はずして善なるもの、勝つ神なり

爾日子番能邇邇藝命將天降之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中國之神於是有故爾天照大御神高木神之命以詔天宇受賣神汝者雖有手弱女人與伊牟迦布神自伊至布以音面勝神故專汝往將問者吾御子爲天降之道誰如此而居故問賜之時答白僕者國神名猴田毘古神也所以出居者聞天神御子天降坐故仕奉御前而參向之侍。

猴田毘古神顯る

こゝに日子番能邇邇藝命、天より今に降らんとする時、天の數多四達の要路に坐り居て、上は高天原を光らし、下は葦原の中國を光す神あり、即ち天照大御神、高木神の命を以て詔り玉ひき、天宇受賣神汝者手弱き女にありと雖も、世界萬有の百姓を下し、父母を迎へ廻り遇ひ擧つて仕に堪ゆる、天道爭はずして善なる者勝神なり、故に專ら汝將に往て問ふべしと、天照大御神の御子、天より降らんとする道に、誰が如此く坐り居ると、天宇受賣命問ひ玉ふ時に、答へ白さく僕は國神名は猴田毘古神なり、出居るわけは天つ神の御子、天降り坐すと聞きし故に、御前しと天宇受賣命天照大御神の伶に從ひ行きて調ぶれば其神の申すには私は國神で名は猴田毘古と申します其此處に居る所以は天つ神の御子を導き奉らんと欲すればなりと申したり。

副話第七十六席　猴田毘古神顯る

天邇岐志國邇岐志天津日子番能邇々藝命神の世界より現世界に出でまさんとする時其道の要に居つて上は高天原の神界を照し下は現世界を照す神あり依て天照大御神高木神の二柱相謀つて天宇受賣神に申さく汝は手弱き女なれども世界にあらゆる生命あるものを生れしめ父母なるものを調合せて能く業務を行ひ天道に從ふて爭はずして勝つことの出來る神であるから汝行きて其道の要に居る譯を調ふべ

伴とは侶なり、依なり、陪なり、
緒とは緒事其功緒に稽くなり、
五伴緒とは藷數の功緒に稽く緒事の臣なり
倶徒依陪し玉ふなり

遠とは遙遙なり岐とはものしるなり斯とは上の二字を指す遠岐斯とは遙遠なるものしりなり伊都岐とはかれこれつくしきものしりなり事業なり

に仕へ奉らんと、參り向ひ茲に侍るなりと。

爾天兒屋命布刀玉命天宇受賣神伊斯許理度賣命玉祖命并五伴緒矣支加而天降也。

爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命等の、數多の功緒に稽く、諸事の臣を支加へて天降りましき。

於是副賜其遠岐斯此三字以音八尺勾璁鏡及草那藝劍亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政此

副話第七十八席 日本國永世鎮護の基元

天孫日子番邇々藝命神界より現世界へ降りまするの時天照大御神は之に授け玉ふ

副話第七十七席 從神の下降

天照大御神の御孫に當らせ玉ふ天邇岐志國邇岐志天津日子番能邇々藝命日本國永世建治の基礎を立る爲御下降相成るに付其事業を助けしむるに五柱の神を副へられましたのであります。

前とはみちびきの事業なり

二柱神者拜祭佐久久斯侶伊須受能宮自佐至能以音次登由宇氣神此者坐外宮之度相神者也次天石戸別神亦名謂櫛石窓神亦名謂豊石窓神此神者御門之神也次手力男神者坐佐那縣也。

日本國永世鎮護の基元

それから遙遠なるものしり、即ち八尺勾璁鏡及び草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ詔す、此の鏡は專ら我御魂となし、天照大御神の御前を拜むが如く、美しきものに八尺勾璁と八阿多鏡及び草那藝劍の三種を以てし且つ教訓を垂れさせ玉ふ抑も此三種の神器は德と智と清との本元で八尺勾璁は萬民を育て養ふ德の凝りたるもの八阿多鏡は世の人の此世に宿り來れる道を明にし且つ世の人の善惡の業を明かに知れる智の凝りたるもの草那藝劍は曾て建速須佐之男命が邪惡を切り其道を極めて得玉ひし者にて惡しき穢を拂ふ清き心の凝りたるもので此三つの寶器と寶器の神髓とは日本國永世鎮護の神でありますから代々天

りと思ひ奉れと、次に思金神は道の事業を取持ちて、政をなせと詔す、此二柱の神は、作久久斯侶伊須受能宮に齋き祭れり、それから登由宇氣神は、外宮之度相にまします神なり、次に天石戸別神亦の名は櫛石窓神と申し、またの名は豐石窓神と申し、此神は御門之神なり、次に手力男神は作那縣にましませるなり。

玉祖連等之祖

故其天兒屋命者中臣連等之祖布刀玉命者忌部首等之祖天宇受賣命者猨女君等之祖伊斯許現度賣命者鏡作連等之祖玉祖命者

皇の事へ奉る所以であります此三種の神器は天則の凝りたる者且つ天神の教訓の共のふものでありますから國を守らせ玉ふことは露塵ほども疑ふべからず彼の支那國にありて伏羲氏鳥獸の羽毛を見て天則を覺り世を治むる法をなし西洋ではイエスキリストが天理を覺りて天の獨子なりと呼んだのが大英國などの國教となり皇冠となり國髓となりて今日の繁榮を成すを見ても又覺り知るべきなり。

石とは世界萬有の神の教へなり

位とは聖の大寶を位と云ふなり

離とは幽神の理を離れて顯神の實に離くなり

雲とは雲も行き雨め施し所謂雨露の恩なり

和とは百穀の和合なり

宇とは大なるたましひなり

岐とは ものしりなり

士とは理官なり

摩とは陰陽和摩し相觀て善きなり

理とはすぢみちなり

蘇とはいきろなり

故爾詔二天津日子番能邇々藝命一而離二天之石位一押二分天之八重多那此二字以レ音雲一而伊都能知和岐知和岐以下十字以レ音於二天浮橋一宇岐士摩理蘇理多多斯以下十字以レ音天降坐于二竺紫日向之高千穗之久士布流多氣自レ久以下二六字以レ音

天孫降臨

天照大御神卽ち天津日子番邇々藝命に詔玉ひて、人やどり育つる世界萬有の神の教の、聖人の大寶を離れて人やどり育つる、幾重の衆多人の國を安んじ、雲行き雨施し所謂雨露の恩を押

副話第七十九席　天孫降臨

天孫邇々藝命幽なる神の位を離れ世の人の育つべき雨露の大業を押開きて現つ神として高千穗嶺に下り玉ふ偖て其年代明かならずと雖も神武天皇は支那の周の世で父に鵜葺草葺不合命あり祖父の火遠理命は中世に人身を受け玉ふと雖も猶在世五百八十年であつたとすれば火遠理命の出生は夏の初め位に當りませう而して其父邇々藝命の降臨は三代五帝の頃か夫以前が分りません邇々藝命は人身を受け玉

し分けて美しき盛なる事業を知しめす、百藥和合のものしり、この日本國を主どり知しめし、百藥和合の岐りて、靈界より現世界に人々渡る浮橋の大なる岐り、且つ後世の理官たる岐り、陰陽相摩して善き理に、衆多衆多其の衆多で、竺紫の日向の高千穗の、久しく柱ふる理官の岐り、星祭り連ね傳へ延し、衆多人を生み育つる所に、天降り坐しましゝなり。

（百藥和合ノヨリトトノフ）（世ヲトト）（天地和合ノサチニ）（數千萬民ヲ作ラントト）（長ク持チ綴ク治者トナリ）（天ニ祈リ地ニツタヘ）（萬民）

故爾天忍日命天津久米命二人取負天之石勒取佩頭椎之大刀取持天之波士弓手挾天之眞鹿兒矢立御前而仕奉故其天忍日命連等之祖天津久米命此者久米直等之祖也

（石勒とは幾千萬億の人の生くべき矢入れなりとは人の始めて作る纖維の大刀なり）（頭椎）（眞）（波士弓とは神の教の理官の剛建の德の元なり）（鹿兒矢とはまことの天下を掌握する權位のはじめの剛建の德なり）

從神の前き

爾に天忍日命、天津久米命、二人天そらの神の教の人の生くべき、矢入を受け收め負ひて、人の始て作れる鐵椎の大刀を受け收め佩び、天そらの神の教の理官の弓を受け收め保ちて、誠の天下を掌握する權位の始めの矢を手挾みて、御前きを成し仕へ奉りき、其の天忍日命は、大伴連等の祖にして天津久米命は、久米直等の祖なり。

副話第八十席　從神の前き

天孫御降臨ましまさんとするや天照大御神先づ天忍日命並に天津久米命の二神に世の人の育つべき剛健の德の出る寶器を負はし世の人の始めて作る大刀を佩びさせ人を治め司る剛健の德を授け天下を掌握する權利を持たしめて先道となし高千穗の嶺に下らしめ玉ひしなり。

（天照大御神先ヅ天忍日命ナラビニ天津久米命ニ）

はず隨て御隱になつたと云ふこともなし壽齡長へに今猶在世かも分りません日本國へは天孫降臨ですが是に前後して他の各國へも夫々神を遣はし君主を立て民を育て玉ひしことは明かであります只本書は日本の古事記とも見るべき書でありますから外國の事が記してない斗りであります。

來とは往來なり　通とは達なり神明の德に通ずるなり　笠とは寒暑を禦ぐものなり　沙とは洲なり　直とは玉道正直を云ふなり

於是詔之此地者向韓國眞來通笠沙之御前而朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而於底津石根宮柱布斗斯理於高天原氷椽多加斯理而坐也

土地の良好

こゝに天津日子番能邇々藝命に詔り玉はく、此の地は韓國に向ひ眞に、人聖靈の往來し、神明の德に通じ寒暑を禦ぎ、州を統べ導き、朝日の直ちに刺す國夕日の照る國なり、此の地は甚だ吉き地と詔り玉ひて、後世に下り至りて、後學

副話第八十一席　土地の良好

天照大御神御孫天津日高日子番能邇々藝命に勅して曰く此處は善き人々の魂い往來して神の德を行ひ暑さ寒さも强からず日神の王道正直に行はれ後々までも日神の思を込めらるゝ國でありますから甚だ宜しき地でありますす後の世になりて學者を濟ひ事の始めには妻子の道を修め人の生れ來ることを思ひ萬の物の出來る道を務められよと申されました

阿とは人とやどり　訶とはいかる、なり　漁とは使取して撈らばす捕魚なり、魚は吾れなり　比とはのりかたちなりか　良とはまことによきなり　夫とはますらをなり　手とは事業を須べからくするなり　咋とは大整なり　合とは大和保合なり　見とはあらはすなり　鹽とは其の腦なり

を濟度星羅し、物事の原氣に妻子を主どり柱へ星祭り連ね兵勢の此の理みち、卽ち高天原に凝り、萬物成り出る道に衆多の父母邂逅し、斯の理みちにましませと詔り玉ひしなり。

故其猨田毘古神坐阿邪訶時爲漁而於比良夫貝自比至夫以音其手見咋合而沈溺海鹽故其沈居底之時名謂底度久御魂度久二字以音其海水之都夫多都時名謂都夫多都御魂自阿至久以音其阿和佐久時名謂阿和佐久御魂下四字以音

猨田毘古神の苦心

副話第八十二席　猨田毘古神の苦心

猨田毘古神の時阿邪訶と申しまして世の中が大に荒れすさみ何うしても人々が此世に生れ出ることが出來ませんのでした其時猨田毘古神吾々の魂を皆取り收めて大丈夫の擧動をなして大に力を盡し大和保合の氣を顯

に宿るなり精心を鹽の如くに土沙に宿して身體を現はすなり　溺とは自ら勝つ能はざるなり

そこで猨田毘古神、阿邪訶とて人宿怒る世界荒る所に坐する時、我等吾人を侵取して撰ばず、則方よき丈夫の寶物の事業を須くし玉ひ、大聲に大和保合をあらはして、天地の其の腦を鹽に し、沙に宿り沈み、自ら天地自然の理に勝つ能はずして、其樞密院に居玉ふ時の御名を、底度久御魂と云ふ、其の天地事物の始めの、美しき盛に衆多の丈夫の、盛なる時の名を、都夫多都御魂と謂ふ、其の人やどり百藥相和し、久しく柱ふる時の名を、阿和佐久御魂と云ふ。

マサシキ　ヨトコノテガラ　宇宙ノソノ神靈ヲ鹽ノ如クニシテ　土沙ニ宿ラシメ未ダ世ニ現レズ　奥ユカシキトコロ

はし世の中に充てる魂を鹽の沙に宿るが如く土に宿らしむと雖も未だ天地自然の理に勝ことが出來なくて奥幽しき處に居らるゝ時の名を底度久御魂と申し今や萬物成出でんとする美しき時の御魂を都夫多都御魂と申し其世の中の諸物が出來上りて持續く時の御魂を阿和佐久御魂と申します。

鰭とは魚之れを鰭と云ふ魚ひれ吾れなり鰭背なり　廣とは廣ひ以て地に配す廣ひ開接の貌ちなり　狹とはせばし狹に同じ　口とは穴蟲の穴名なり鼠は小獸喜盜をなすなり　拆とは象形なり又た人別なり　島とは秋津とは嶼なり毀なり島なり　速とはやきなり　贄とは玉帛を執るなり

於是送猨田毘古神而還到乃悉追聚鰭廣物鰭狹物以問言汝者天神御子仕奉耶之時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白爾天宇受賣命謂海鼠云此口乎正答之口而以紐小刀拆其口故於今海鼠口拆也是以御世島之速贄獻之時給猨女君等也。

盜を罪する始め

こゝに比良夫貝が、猨田毘古神を送りて、現世界に還へり到りまして、吾れ民の良きもの惡きものを追ひ聚め、其方は天神の御子に仕へ奉ら

副話第八十三席　盜賊を罪するの始め

比良夫貝と申しますと田螺か蜆貝の樣に思ひますかも分りませんが實はさう云ふものでなく其當時の時勢を支配し玉ふ大優勢の神樣でありますす其比良夫貝と申す神樣が猿田毘古神を艱難辛苦の海より送出でゝ萬物成出でたる世の中に歸しまして人民の良き者惡き者を集めて天孫邇々藝命に仕へまつれと申し渡しければ皆仕へまつると申しける其中に盜を業とする者答へさりければ天宇受賣命盜賊を紐繩

んやと詔玉ひしに、諸民皆仕へ奉らんと白しき、其中に天地の穴蟲盗を成すものは白さず、彼の天宇受賣命は、天地の穴蟲に謂て曰はく、此の人別や答へざる人別であると、紐又は小刀を以て人別を裂き毀てり、今世にも天地の穴蟲にして盗をなすもの、人別裂け毀てり、是を以て秋津島の速き玉帛を、神に奉るの時に猿女君等に分ち給ふなり。

百とは百官以て始まるなり
取とはうけなさめなり
机とは物を承るものなり

於是天津日高日子番能邇邇藝能命於笠沙御前遇麗美人爾問誰女答白之大山津見神之女名神阿多都比賣亦名謂木花之佐久夜毘賣以此五字音又問有汝之兄弟乎答白我姉石長比賣在也爾詔吾欲目合汝奈何答白僕不得白僕父大山津見神將白故乞遣其父大山津見神之時大歡喜而副其姉石長比賣令持百取机代之物奉出故爾其姉者因甚凶醜見畏而返送唯留其弟木花之佐久夜毘賣以一宿爲婚爾大山津見神因返石長比賣而大恥白送言我之女二竝立奉由者使石長比賣者天神御

にして其容を毀しとかや故に今も盗をなす者は身を隱ししつゝあると云ふことであります。

副話第八十四席　天孫邇邇藝能命の御婚儀

天孫天津日高日子番能邇邇藝能命天降りましに難を凌ぎ親の家を辭し出でゝ夫の心を識り自分の本來の身分に達する道で麗美人と申して美しき娘に遇ふたのです美しき娘と謂ふ此御方は未だ人體の美は御持ちでないので只其子孫が幾千萬年となく恆へに日本國に君主たる美しき基を持たせ玉ふ美人なのであります此娘ぞ木花佐久夜毘賣と申して大山津見神の女であります

代とは世なり
阿とは人とやどなり
摩とは陰陽相摩し相觀て善きなり
比とはのりかたなり
能とは事業を能くするなり
微とは不明なり
字とはほひなり
氣とは生るゝなり
壽とはひさしくさそふるなり
百取机代之物とは百官以て始まり物を敬めうける世々の物を持たしむるなり
宇氣比弖とはおほひに生るのりかたなり
木花之阿摩比能微とは業ゆる人とやどの陰陽相摩して善きのりかた事業を能すること不明にまします申すなり

が其嫁入仕度としては姉の石長比賣と百取机代物の二品であります其石長比賣は子孫の壽命を護る守神であ

子之命雖雪零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜毘賣者如木花之榮榮坐宇氣比貢進此今返石長比賣而獨留木花之佐久夜毘賣故天神御子之御壽者木花之阿摩比能微坐故是以至于今天皇命等之御命不長也。

（自字下四字以音）（此五字以音）

是に於て天津日高日子番能邇々藝能命、笠沙御前とて寒暑を禦ぎて、親を辭し家を出で、心を識り本に達する道で麗美人に遇ふ、卽ち誰の女と問ひ玉へば答へ白さく、大山津見神の女、名は神阿多都比賣、亦の名は木花之佐久夜毘賣と謂ふ、亦汝の兄弟ありやと問ひ玉へば、我姉石長比賣有りと答へ白しき、天津日高命詔たまはく、汝と目合んと欲ふ奈何にと、妾は白すを得ず、妾が父大山津見神將に白し上げんと答へ玉へき、天津日高命、其父大山津見神に乞ひ遣はせば、父大に觀びて其姉石長比賣を副へて、百取机代物とて世々の物を收め受け百官始まるの德を持たしめ、出し奉りき、卽ち天津日高命は、姉は甚だ凶醜に因り見ひ畏みて返へし送り

り百取机代物とは人々より種々の貢物を受けたり百の官吏の從ふ德のことであります此二つのものを木花佐久夜毘賣に添て夫と邇々藝能命の元へ參らせました噫世の流れ行く情態は日一刻も止むべきにあらず神世の時代は已に盡き人皇の世と成らせらるゝ前兆にやましけん姉の石長比賣の壽命を護らせ玉ふ御德は邇々藝能命の御意に叶はずして御返しとは相成ました茲に於てか木花佐久夜毘賣の種々の貢物を人民より受け玉ひ百官從ひ奉る御德のみ皇室に

傳はることゝなり其御子火遠理命より壽齡が定まりましたので火遠理命は人身を受けてより在世五百八十年其御孫神武天皇は壹百三十七年御在世で御隱れとは相成樣に世は進行し來たものであります。

玉ひき、唯其の妹の木花之佐久夜毘賣を留めて、一宿婚を爲す、そこで大山津見神、其石長比賣を返へせしに因り、大に耻ぢ白し送りて白さく、女二並を立て奉る由は、石長比賣を使はせしは、天神の御子のいのち雪降り風吹くと雖も、恒しなへに石の如く常に堅く、動かずしてましませと、亦木花之佐久夜毘賣を使はせしは、木の花の榮ゆる如くにして、大に人の生るゝ則方なるにより、進め貢りしなり、今此石長比賣を返へして、獨り木花佐久夜毘賣を留め玉ふ故に天神の御子の御壽は、榮ゆる人やどの陰陽相摩して

戸とはまもるなり　土とは五行の一地の生物を吐くものなり地の下地の中物出る形に象どるなり　火とは化なり隨なり陽氣を用ゐ萬物變隨するなり　著とはあらはすなり

善き、則方の事業を能する事、不明にまします、故に今世に至るも天皇樣方の、御命長からざるなり。

故後木花之佐久夜毘賣參出白妾妊身今臨産時是天神之御子私不可産故請爾詔佐久夜毘賣一宿哉妊是非我子必國神之子爾答白吾妊之子若國神之子者産不幸若天神之御子者幸卽作無戸八尋殿入其殿內以土塗塞而方産時以火著其殿而産也故其火盛燒時所生之子名火照命此者隼人阿多

副話第八十五席　木花佐久夜毘賣三神

を生み玉ふ

天孫天津日高日子番能邇々藝能命も其御后の木花之佐久夜毘賣も未だ人身は受け玉はず神として御活動なされた御方であります抑も神と申すことは如何なる者か支那の老子の樣な理屈を謂つた男でも谷神死せずと申して神の事は思ひ議ること

次生子名火須勢理命須勢理三字以音次生子御名火遠理命亦名天津日高日子穗穫手見命三柱

木花之佐久夜毘賣三神を生む

故に後に木花之佐久夜毘賣、參り出て白さく、妾は妊める身なるを、今産む時に臨みて是れ天神の御子を、私に産むべきにあらず、故に御請ひ申し奉ると、天津日高命詔り玉はく、佐久夜毘賣一宿にして妊めると云ふ、是れ我子にあらず必ず國神之子ならんと、吾が妊める御子若し國津神の御子なれば、産む事容易ならず、若し

が出來ないと申して居ります此古事記は神の御志慮と御行爲を記した者でありつるも其處業や高さより底さに廣さより狹さに大より小と通達し氣化し水となり水化して萬有となる造化の致密は筆や言葉の盡す限りでない其思ひ議ることの出來ない神樣が御子を生みますので是又思ひ議ることが出來ません此書に記してある生み方を鳥渡御話しすると戸垣なき御殿と云ふので此處から此處と云ふ限りのない廣き所に萬物の或出づる化生の理を垣となし陽氣

天神の御子なれば、易かるべしと答へ白しき、卽ち戸垣なき廣き御殿を作り、其の御殿の中へ入り玉ひ、萬物成り出る形象で塗り塞ぎ、産む時に方りて其の廣き御殿に、陽氣事を用ひ萬物變隨するの理、及び形象を著はして産みましゝなり、其の萬物變隨して形象顯はるの氣、盛に野に蔓る時に、生れませるの御子の御名は、火照命、次に生れませる御子の御名は、火須勢理命、次に生れませる御子の御名は、火遠理命、又の名は、天津日高日子穗々手見命合せて三柱なり。

を生じて萬物變化せしむる理を用ゐて同時に三柱の神樣を生み玉ひしと申します又不思議な事であります。

海とは天地なり　佐とはたすけなり　知とはつかさどりなり　毘とは明るしめすなり　厚なり　古とは久なり始なり　鰭とは魚の總名之れを鰭と云ふなり　山とは山なり萬物産出するものなり　毛とは機性の純色を毛と云ふ桑麻五穀の屬皆な毛と云ふ　麁とは草木の新生を柔と云ふなり　鉤とは武器にて敵を引き寄せる具なり　釣とは聖人の釣は天地を海とし萬民を魚とし仁義を竿とし利欲を餌とす　魚とは吾れなり　都とは總てなり　鉤とは義理を鉤り索むるなり理を窮むと云ふも如し　用とはたかなを天下に明にせんと欲するなり　相とは天下の宜しきを輔相するなり

故火照命者爲海佐知毘古（此四字以音下效之）而取鰭廣物鰭狹物火遠理命者爲山佐知毘古而取毛麁物毛柔物爾火遠毘命謂其兄火照命各相易佐知欲用三度雖乞不許然遂纔得相易爾火遠理命以海佐知釣魚都不得一魚亦其鉤失海於是其兄火照命乞其鉤曰山佐知母己之佐知佐知海佐知母己之佐知佐知今各謂返佐知之時（佐知二字以音）其弟火遠理命答曰汝鉤者釣魚不得一魚遂失海然其兄强乞徵故其弟破御佩之十

副話第八十六席　火遠理命民を治むる御修業

兄の火照命は天下を知しめす明主となり人民の良きもの惡きもの殘るくまなく御捌きとなり弟の火遠理命は萬物を産出する明主となりて牧畜桑麻五穀の類總べて御捌きとなりました弟火遠理命は兄の火照命に其司る所の業を替へんことを幾度か乞へども許されず最も後に僅に許されました弟火遠理命喜んで兄の敵を引寄する道具を持ちて世の中の民を釣りたるに一人の應ず

欲とは明德を天下に明にせんと欲するなり　相とは天下の宜しきを輔相するなり

拳劍作五百鉤雖償不取亦作一千鉤雖償不受云猶得得其正木鉤

火遠理命民を治むる御修業

そこで火照命は、天地を佐け主どり知召す、明かなる始めとなり、吾等人民の、善きもの惡きものを受け收め、火遠理の命は萬物産出る理を、佐け主どり知召す、明かなる始となり、犧牲桑麻五穀の類、大なるもの新しきものを受け收め玉ふ、卽ち火遠理命は、其兄樣火照命に、各々佐け主どる德を替へて、寶の明德を天下に明にする者もありませんでした然のみならず剩へ其敵を引寄する道具まで世の中で失なつてしまつた兄の火照命は頻りに其敵を引寄する道具を返へすべしと迫りつゝ曰く天下の民を主るも我德なり萬物を産出するも我德なり早く其敵を引寄する道具を返せよと迫りて止まなかつた、すると火遠理命は自分の持德なる萬物を産出する德を以て幾多の敵を寄引する道具を作り兄の火照命に返へし玉ふと雖も受け玉はず矢張り敵を引寄する本の道具を返へせよと謂つて

せんと、三度び乞と雖も許されざりしが、終に僅か替へられ玉ひき、卽ち火遠理命、天下を佐け主どる德を以て、敵を引寄す道具で民を釣り求るに統て一民も得ず、復其敵を引寄する道具を天下に失ひ玉ひき、茲に於て其の兄火照命、其敵を引寄する道具を乞ひて曰はく、萬物の產出を佐け主どり養ふも、自分の佐け主どる所、天下を佐け主どり養ふも、自分の佐け主どる所、今各々佐け主どる、德を返へせやと詔玉ふ時に、弟火遠理命答へ玉はく、兄上樣の敵を引寄する道具を以て、民を釣りしに一民も得ず遂に天下世ノ中止まなかつたのであります

海とは天地なり　邊とは墟城なり　廬とは神氣足らざることなり　空とはいたづらになり　津とは後學を濟度するなり　日とは大陽の精の充てる

に敵を引寄する道具を失ふ然れども火照命は、強ひて乞ひ求め玉ふ、其弟自分の佩びさせ玉ふ、十拳劍卽ち萬物產出の德を破り、幾多の敵を引寄する道具を作り、償ふと雖も受け收め玉はず、無數の敵を引寄する道具を作り償ふと雖も受け收め玉はず、やはり天下を佐け主どる本の道具を得んと詔り玉ひき。

副話第八十七席　火遠理命鹽椎神の教を受け玉ふ

於是其弟泣患居海邊之時鹽椎神來問曰何廬空津日高之泣患所由答言我與兄易鉤而失其鉤是乞其鉤故雖償多鉤不

火遠理命兄の火照命の萬民を釣り天下を治むる鉤を世

なり　高とはたふとぶかみなり　鉤とは敵を引寄する具なり　无とは咎なしなり　間とは病の癒ゆるなり　勝とは競はす善きもの自然的に勝つなり　問とはやんずなり　味とはとりしらべ興味ありかんがへ知るなり　鱗とは陰陽和合して人を生するなり　井とは清深きなり　上とはかみなり　湯とは憑沸ふなり　加とはますなり　都とはくしきなり　良とはよきなり

受云猶欲得其本鉤故泣患之爾鹽椎神云我爲汝命作善議卽造无間勝間之小船載其船以教曰我押流其船者差暫往將有味御路乃乘其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見神之宮者也到其神御門者傍之井上有湯津香木故坐其木上者其海神之女見相議者也（訓香木云加都良）

火遠理命鹽椎神の教を受け玉ふ

そこて其の弟天と地の境神理界の邊りに、泣き患ひ居ます時、鹽椎の神來り問ふて曰く、何かの中に失ひたるため兄に訶嘖せられて現世界と神の世界との境邊に泣き患ひ居ませるを鹽椎神來りて問ふて曰く天德盛にして萬民を濟ふ貴き神の泣き居ませるは何事ぞや火遠理命は前に行ひ來りし事の一部至次部殘る所なく話をすると鹽椎神曰く我れ汝の命の爲に善き謀をなさんと即ち无間勝間と謂ひて咎がなければ病は直り善なる者は自然に勝つの小船を作り火遠理命を乘せ參らせ且つ教へて曰く我れ此船を押流すべし暫く往くと面白く進む道あるべ

に神氣足らず、徒に後學者を濟度する太陽の精の充る、貴ぶ神の泣き患ひませる、由はと問へば、火遠理命答へ玉はく、我兄の火照命と敵を引寄する武器を易へて其の武器を失ふ、卽ち火照命其武器を乞ひ求め玉ふ、故に幾多の武器を作り償ふと雖も受けず、やはり天地を佐け知し召す、本の武器を惜み玉ふが故に、泣き患ふるなりと、こゝに鹽椎神曰く、我れ汝の命の爲に善き議事を成さんと云ひて、卽ち咎なければ病瘳へ、善者自ら勝ち安んずる小船を作り、其船に火遠理命を乘せ教て曰く、我れ其船を押し流し其道を進み行かば魚の鱗の如く造れる宮と謂つて天地和同し陰陽相應じ人を生むべき家あり此家は綿津見神の宮である其宮の門前に至り傍の清淨なる所に後世を濟ふ益々良き道理あり其道理の上に座し玉はゞ綿津見神の女相見て相談するであらうと申されました

玉とは石の美なるもの五德あり潤澤以て溫仁之方也鰓理自レ外可レ知レ中義の方なり其聲舒揚專以遠聞知の方なり、

し、稍暫く往きて將に取調べ、興味を考へ知り世を統べる路あり。

其道に乘り往きませば、魚の鱗の如く造れる宮は、其れ綿津見神の宮なり、其神の御門に到りなば、傍へに清く深くして神は惡しきを拂ひ、後學を濟度し、益々盛んによき理あり、其理の上に坐しませば、海神の女相見て共に議る者なりと。

故隨レ教小行備如二其言一卽登二其香木一以坐爾海神之女豐玉毘賣之從婢持二玉器一將レ酌

副話第八十八席　火遠理命神理國に滯在す

不曉而折勇の方なり鉛廉不レ技潔の方なり **器**とは才能度量にして使用に堪へるを得せしむるなり **水**とは萬物を任養するなり **酌**とは善を取りて行ふなり **光**とはてらしなり **遠登古**とはとほく衆を成熟し衆に進む先祖なり **飲**とは言はすして人を飲む和を以てするなり **璵**とは璵璠なり、璵璠は寶玉なり孔子曰く一則理勝ち二則孚勝つなり **口**とは形象なり **含**とは萬物を含む化は光するなり **唾**とは口液なり口液は形象の汁なり **美**とは好色なり **智**とは知らざる所ろなきなり **皮**とは强語

水之時於井有レ光仰見者有二麗壯夫一訓壯夫二云遠登古一下效此以爲甚異奇爾火遠理命見二其婢一乞欲レ得レ水婢乃酌レ水入二玉器一貢進爾不レ飲レ水解二御頸之璵一含レ口唾二入其玉器一於是其璵著レ器婢不レ得レ離璵故璵任レ著以進二豐玉毘賣命一爾見二其璵一問二婢一曰若人有二門外一哉答曰有人坐二我井上一香木之上一甚麗壯夫也益我王而甚貴故其人乞レ水故奉レ水者不レ飲レ水唾二入此璵一是不レ得レ離故任レ入將來而獻爾豐玉毘賣命思レ奇出見乃見感目合而白二其父

火遠理命は鹽椎神の教に隨ひ出で行きまするほどに西か東か方角さへ覺へなく心欣然として漕ぎ行けば鹽椎神の教への如く魚の鱗に似て天地和合し陰陽相應じ人を生むべき麗しき宮ぞありけり天地和合し陰陽相應じ人を生むを何故ぞ鱗とは云ふのであるかは御尤の疑ひであります生花の法に曰く人左右の手を東西とし面を南に背を北として直立し而して後ち足は足手は手と相合すれば魚の鱗の形となる人の頭は天にして足は地なり手の合は人なりと云ひて

を云とあるなり　疊とは重なり　絕とは音は施なりめくみあたふほどこし雲行き雨施すなり

曰吾門有麗人爾海神自出見云此人者天津日高之御子虛空津日高矣卽於內率入而美智皮之疊敷八重亦絁疊八重敷其上坐其上而具百取机代物爲御饗卽令婚其女豐玉毘賣故至三年住其國。

火遠理命神理國に滯在す

火遠理命鹽椎神の教に隨ひ、少し行きませば悉に其言葉の如し、卽ち其香木に登りて坐りまし き、卽ち海神之女、豐玉毘賣の從婢、五德の才能を持ちて、萬物任養の善き法を取りて行ふの

是を天地和合し左右の陰陽相應じ人を生むとは說いてあります其魚の鱗の如き麗しき宮は是ぞ綿津見神の家にして其門外に至れば湯津加都良と謂ひて惡しき事を拂ひ後世を濟ひ益々盛んに良き道理あり其上に火遠理命座を定め玉ふ間もなく綿津見神の女豐玉毘賣の從女が仁義智勇潔の五德の器で萬物發生の理を酌み取らんとするとき清き深き所に光りあり仰で上を見れば麗しき遠登古あり其遠登古は火遠理命にして豐玉毘賣の從女に萬物發生の法を求めし

時、淸きに光しあり、仰ぎ見れば麗はしく、遠く衆を成熟し業に進む先祖有り、甚だ奇しと思ふ火遠理命其婢を見玉ひて、萬物任養の法を得んことを乞ふ、婢は卽ち萬物任養の善き行ひを、五德の才能に入れ奉りき、火遠理命萬物任養の和を取らず、御頸の寶玉を解かして、其五德の才能に、形象の汁を入れ玉ふ、こゝに其寶玉五德の才能に著れて、從婢其の寶玉を離つを得ず、故に從婢寶玉の著れたるに任せて、豐玉毘賣に進りき、かれ豐玉毘賣其寶玉を見て、婢に謂て曰く若し門外に人ありやと、婢答へて曰く、我

諸物ノカタチノ元

發生

發生

かば從女は仁義智勇潔の五德の器に入れて奉りたり然るに火遠理命は萬物發生の法を取らずして御頸に裝りある寶玉とて一つの則には理勝ち二つの則には孚勝つの璵を解いて萬物の元素と共に從女の持たる仁義智勇潔の五德の器に入れ玉ふ其從女は五德の器に萬物の元素と寶玉の著れたるを離つことが出來なくて入れながらにして豐玉毘賣に進め奉りたり豐玉毘賣奇しと思ひ出でゝ火遠理命を見心に感じ父綿津見神に告ぐ綿津見神出で見て曰く是れは天津

清き深き湯津香木の上に人あり、甚だ麗しき壯夫なり、我が海神に益りて甚だ貴し、其の人萬物任養の法を乞ふにより、萬物任養の法を奉りき、然れども萬物任養の法を和せずして、此の五德の才能に寶玉や形象の汁を入れ玉ひしかば、是を離ち得ざりしが故に、入れ任がら持ち來りて奉ると、玆に豐玉毘賣奇しと思ひ、出で見玉へば、乃ち心に感じ目合して、父に謂て曰く吾が門に麗はしき人ありと、爾海神自ら出て見玉ひしかば、此人は天津日高之御子虛空津日高と云ふ、卽ち內に率入れて、好色知らざる所

（萬物任養の法を奉りき　發生）
（萬物任養の法を和せずして　用ゆ）
（萬物任養の法を　發生）
（日高之御子虛空津日高と申人なりとて麗しき宮の內へ引入れ美智皮之疊とて好色行き屆かぬ所なき幾重を敷き絁疊とて惠與を行ふ幾重を敷き朝庭には百官資て始まり千世に八千世に貢物を民より受くる道理を御饗として豐玉毘賣の婚儀を行ひました依て火遠理命は永年其處に御住居とは相成ました）

赤（とは露れ出ること又た赤子とて生れ出ることなり）海（とは天地なり）鯽（とは柔剛の切し音賊なり）魚（とは吾れなり吾れば民なり）喉（とは王命なり出納するなり）鯁（とは魚骨なり、魚骨は正直なり單に正直とも云ふなり）淤（とは濁泥なり）煩

なき重ねの幾重を敷き、亦惠み與へ施しの重ね幾重を敷きて、其の上に坐る百官資て始まり物を收め受くる、世々の物を具へて、御饗をなし玉ひ、女豐玉毘賣の婚とし玉ふ、故火遠理命、三年に至るまで其神理國に住し玉ひき。

於是火遠理命思其初事而大一歎故豐玉毘賣命聞其歎以白其父言三年雖住恒無歎今夜爲大一歎若有何由故其父大神問其聟夫曰今且聞我女之語云三年雖坐恒無歎今夜爲大歎若有由哉亦到

副話第八十九席　火遠理命綿津見神の助けを受け玉ふ

玆に火遠理命綿津見神の麗しき宮に在せらるゝこと永ね間であつた時に火遠理命は前に此世界に出で玉ひし事を思ひ大に歎かれしこと

とは煩勞なり數々志を煩するなり又閑なり　須とは待なり用なり資なりすべからくたすけもちゆるなり　宇とは大なる綺心なり　流とはつたはるなり　探とは遠く之を取るなり　高とはたつときなり　田とは民を養ふことなり　作とは新たに民を作すなり　下とはいやしきなり　營とは度り治むるなり　盈とは器に滿つるなり天地盈虛時と消息するなり　乾とは天にして進て息まざるなり　惚とはうつとりして自失するなり　一とは大治の道一に立つ天地を造り分け萬物を化成するなり　尋とは抽引て出づるなり　和とは百藥和合なり　邇とは父母孔邇近つき移るなり　頸とは中央なり　載とは乘するなり

此間之由奈何爾語其大神備如其兄罰失鉤之狀是以海神悉召集海之大小魚問曰若有取此鉤魚乎故諸魚白之頃者赤海鯽魚於喉鯁物不得食愁言故必是取於是探赤海鯽魚之喉者有鉤卽取出而清洗奉火遠理命之時其綿津見大神誨曰之以此鉤給其兄時言狀者此鉤者煩煩鉤須須鉤貧鉤宇流鉤云而於後手賜於煩及須須宇流六字以音然而其兄作高田者汝命營下田其兄作下田者汝命營高田爲然者吾掌水者三年之間

が一夜ありますのを后の豐玉毘賣聞きて其父君綿津見神に語つて曰く永ね間火遠理命此處に居ますと雖も歎かれしことはないのである只昨夜一夜大に歎かれましたのは何かの故がありませうと申されました綿津見神之を聞ひて聟君の火遠理命に問ひ玉ふに今朝女の話を聞けば永ね間居ますと雖も常々は歎き玉はざるに昨夜大歎きに歎かれしは何事でありますか何か譯があるなれば話し玉へと申されし程に父遠理命は其兄の鉤を借りて之を世の中に失ひ兄に

必其兄貧窮若恨怨其爲然之事而攻戰者出鹽盈玉而溺若其愁請者出鹽乾玉而活如此令惚苦云授鹽盈珠鹽乾珠并兩箇卽悉召集和邇魚問曰今天津日高之御子虛空津日高爲將出幸上國誰者幾日送奉而覆奏故各隨己身之尋長限日而白之中一尋和邇白僕者一日送卽還來故爾告其一尋和邇然者汝送奉若渡海中時無令惶畏卽載其和邇之頸送出故如斯一日之內送奉也其和邇將返之時解所佩之紐小刀訶嘖せられて患ひ居たる時鹽椎神來り教へて玆に至らしむ有樣を殘る所なく語し玉へば綿津見神は之を聞きて世の中の人民を殘らず召集めて曰く敵を引寄する武器を取り藏したる者ありやと衆皆曰ふ此頃出て來た盜賊も王法が隅から隅まで行き渡るので正直と云ふことを思ひ出し心配して食事も食べられぬと云ふうが大方此賊盜が取つたのであらうと即ち世の中の賊盜を直き王法を以て全議致しければ敵を引寄する武器が藏してありました依て之を取り出

著其頸而返故其一尋和邇者於今謂佐比持神也。

火遠理命綿津見神の助けを受け玉ふ

爾に火遠理命其の初めの、現世界へ出でませし事を思ひて、大なる一歎きをなし玉へり、かれ豐玉毘賣其歎きを聞こし召して、其父に謂て曰く三年住み玉ふと雖も、常には歎き玉はざるに、今夜大なる一歎き爲し玉へるは、若し何かの由あるならんと、海の大神其聟君、火遠理命に問ひ玉はく、今朝我が女の語るを聞けば、三年坐ますと雖も、常は歎きなし、今夜大歎きをなし清く洗ひて火遠理命に獻じ奉り曰く此武器を兄に讓り玉ふ時は此武器は穢れて心苦しむ武器其穢れたる働きを成すの武器貧窮する武器其貧窮の心の傳はる武器と云ひて後より渡しなさい而して其兄樣が良き人を養ひ新たに民を作りなば汝の命は惡しき人を教へ養ひ兄樣が賤しき人を教へて新たに人を作らば汝の命は貴き人を養ひ育ゝべし私は世の中の總べて物の生ずる道を司り居れば三年の間には兄上樣が必ず貧窮に落入り其身は困難となりて汝の命

玉へるは、若し由ありや、又こゝに到りませる由奈何と問ひ玉へば、火遠理命海見大神に、備さに前の如く民を釣るの武器を失ひし、罰の有狀を語りき、こゝに海見神悉く、天地の大小の吾民を召集め、吾民を釣るの武器を受け收めたる、民ありやと問ひ玉ふ、諸の民白さく、此頃露はれ出たる天地の賊民も、王命出納して正直心ニ出入シテあり、食物も食ひ得ず愁ふと言故、必ず是を受け收めしならんと、露はれ出たる天地の賊民の王命出納の理、遠く之を取りしかば、民を釣るの武器あり、受け收め出して清く洗ひ、火遠の御處業を怨みて戰爭とならば鹽盈玉と謂ふ潮の滿つる術を用ゐて溺かせよと偖て潮は獨り海水にのみあるでなく宇宙間至る所山でも野でも空氣の中でも潮の盈たり乾たりするとこは陰陽和合上日に四度づゝありますので此滿潮の時期を斗りて溺かせよと云ふのであります兄上が溺れて愁ひ助けを請はゞ鹽乾玉とて潮の乾く時期を用ゐて兄を助けよ此く致さば兄は惚として自失するであらうと申して鹽盈玉と鹽乾玉の二つを惠まれましたと云ふのは潮の盈

理命に奉りし時、其綿津見大神、火遠理命に誨へて曰はく、此武器を以て其兄に讓り玉ふ時に、言す有狀は、此武器は淸からずして志しを勞する武器用に資し侍るの武器貧しき武器大なる精心の傳はる武器と云ひて、後手に賜へて、然して其の兄が高き民を養ひ、新に民を作らば、汝命は賤き民を養ひ度り治め、其兄賤き民を養ひ新に民を作らば、汝命は高き民を養ひ度り治め玉へ、然かすれば吾れは萬物任用を掌さどれば、三年の間に必ず其の兄貧しくなり、御身困り玉ふべし、若し其の業を爲すを怨み玉ふて攻たり乾たりする時を敎へられたことなのでありませう而して和邇魚召集むと云ふことは世の中の物質を和合し其化が人體となり此世に生れ出しむ伎能ある者を召集むと云ふことなのですが其伎倆ある者どもを召集めて火遠理命が人の世界へ出でますにより誰が幾日で送り奉りますやと問しに天地を作分け萬物を化成して引出し諸物質を和合して人を生れしむことの出來るものが一日に送り奉ると云ふのは一日に生れ出ることを云ふのであります其一日

め戰ふ時は、沙に宿り天地盈虛時と共に、消息するの寶玉を出して溺らかし、若し其の時に愁ひて助けを請はゞ、沙に宿り進て息まざるの寶玉を出して活し、此の如くせば其の兄惚として、自失し苦まんと云ひて、鹽盈珠鹽乾珠を幷せ、兩個を授けて、悉くの百藥和合し、現世に近き移るの、民を召し集めて問ひ玉はく、今や天津日高之御子虛空津日高、幸ひに上の國に將に出んとす、誰が幾日に送り奉りて復へりごとを奏せんやと、玆に於て各々自分の身の抽き出す、長けに隨ふて日を限りて白す中に、天地を造りに生出でしむることの出來る者即ち和邇に汝送り奉れと申して海の中を渡る時畏れしむ勿と云ふのは神の世界より人の世界へ生れ出づる道中を云ふので其生れ出る時大事に致し奉れと申さるゝのでありますから玆に始めて火遠理命は物質的人間と云ふ玉體を受け玉ふので夫より五百八十年在世で御隱れに相成つたのでありますが而して和邇の中央に乘じ此世へ生出で玉ひしと云へば此頃が人々の地球上に存在する中央なのでありませうと思ひます

分け、萬物を化成し抽き出て、百藥化合し近き移るもの、僕は一日に送り卽ち還へり來ると白しき、其の萬物化成を抽き出だし、百藥和合し近き移るものに、然らば汝送り奉れと、若し天と地の要を渡る時に、畏み恐れしむ勿れと、こゝに其の百藥和合し近き移るの、中央に乘じ送り出て奉りき、如斯く一日の内に送りませり、其の和邇の將に返へらんとする時に、佩ふる所の紐小刀を解て、其人の生まるゝ中央に著はして返し玉ふ、かれ其の萬物を化成し抽出し、百藥和合し近き移るものを、今に佐比持神と謂ふ

移るもの、アジムモノ　しき、ツクリテ　近き移るもの、アジムルモノ　人ヲツクリ生レ出ジムル　人ノモトヲツクリテ生レ出　人ヲ作リ出スモノ　天ノ鏡　生レ出デジムル　ツクリテトリダシ　モト　ヲアハセテ世ノ中ヘ出ス

溺とは自ら勝つ能はず　種とは邁めて德を種くなり　惚とはうつとりとして自失すなり

なり。

是以備如海之教言與其鉤故自爾以後稍愈貧更起荒心迫來將攻之時出鹽盈球而令溺其愁請者出鹽乾球而救如此令惚苦之時稽首白僕者自今以後爲汝命之晝夜守護人而仕奉故至今其溺時之種種之態不絶仕奉也。

王道大に起る

こゝを以て海の神の、教の如く、其の民を釣の武器を與へ玉へき、火照命夫れより後は、愈貧

副話第九十席　王道大に起る

偖て火遠理命は綿津見神の教に隨ひ敵を引寄する武器即ち火照命より借受けた本の鉤を火照命に渡しければ兄の火照命は夫より次第に貧しくなり遂に荒き御心を起して火遠理命を攻めました其時火遠理命は鹽盈玉と云ひて宇宙間に潮を滿たして兄を溺かし兄が愁ひて救を請へば鹽乾王と云ひて宇宙間の潮を乾かして兄を救ひたり其時兄の火照命始め

しくなりて、更に荒き御心を起して迫り玉ひ、將に攻んとする時は、沙に宿り天地盈虛時と消息（世ノ中ガ滿タリ缺タリスル時節）するの寶玉を出し、自ら勝つ能はざらしめ、其愁ひ請ひ申せば、沙に宿り進て息まざるの、寶玉を出して救ひ、如此して惚として自失し玉ふ時、我れは今より後、汝命の晝夜守護人となりて仕へ奉らんと、故れ今に至るまで自ら勝つ能はざる時、邁めて德を種きし態に絶えず後の皇位に仕へ奉るなり。

於是海神之女豐玉毘賣命自參出白之妾の間は惚として居つたが後には覺つて曰く今より僕は汝火遠理命の護り守となり常に仕へ奉ると今になりても其溺れし時に助けて貰つた恩德に絶へず酬ひ奉ると申します

副話第九十一席　帝

邊（とは姓なり、邊陲なり、窘くな）

り　那藝佐（とは國を安んじ才能文藝を佐すくるなり）

鵜（とは水に沈で魚を食ふ水は萬物を任養す、沈はひろし、魚は吾れ、民食ふはやしなふなり）羽（とは左右輔佐なり）加（とは矛にして設る所ろ用ゆる所ろあり、弧にして加ぶる所あり）夜（とは天の幔を伺ふなり）侘（とはこころほれるなり）匍（とは地に伏し手に行ひ力らを盡すなり）匐（とは地伏し見る手を以て行ふなり）委（とは生汝ぢ有にあらず是れ天地の委和なり、性命汝ぢ有るにあらず是れ天地の委順なり子孫汝ぢ有るにあらず是れ天地の委蛻なり）

已姙身今臨二産時一此念天神之御子不レ可レ生二海原一故參出到也爾卽於二其海邊波限一以二鵜羽一爲二葺草一造二産殿一於是其産殿未葺合不レ忍二御腹之急一故入二坐産殿一爾將方産之時白二其日子一言凡侘國人者臨二産時一以本國之形一産生故妾今以二本身一爲レ産願勿レ見レ妾於是思レ奇二其言一竊二伺其方一産者化八尋和邇一而匍匐委蛇卽見驚畏而遁退爾豐玉毘賣命知二其伺見之事一以爲二心耻一乃生二置其御子一而白レ妾恒通二海道一欲二往來一然

室王體の始め

綿津見神の女豐玉毘賣神の世界より人の世界へ出でまして申しける妾は已に姙める身なるを此御子を神の世界に生むべからず故に出で來れるなり日本國を安んぜんため才能を啓發し文藝を起し萬物を發生し廣く民を養ひ外より輔くるに柔なる者も事を成すあり剛直の者も仁德を行ふことあり弱き者も用達ことあり驅め勵む者は益々盛大になる時勢の樞を伺ひ御子を産み玉ふ御殿を作り其産殿未だ仕上らずと云ふのは前に述べたる

委蛇とは自得の貌なり

坂とは舜浦坂に都す又身熱の坂なり

伺見吾形是甚怪之即塞海坂而返入是以名其所産之御子謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命（訓波限云那藝佐云加夜）

帝室玉體の始め

こゝに海神の女、豐玉毘賣命、自ら參り出でて白し曰く、妾は已に妊める身なるを、今産む時に臨みて此れを念ふに、天神の御子を天地の原（神理界）に生むべからず、故に參り出て到りませるなりと、即ち其の國を安んじ才能文藝を佐け、萬物（世ノ中ヘ）任養し廣く吾民を養ひ、左右の輔佐を以て柔に（發生）

道理が完全に齊はないと云ふことであります其道理は充分齊はなくても御身腹が待ち兼ねて産殿に入り玉ふ而して其夫火遠理命に申しける佗る賤しき者は子を産む時になれば元の生れ來た形になりて産むのであるから妾も生れ來た形になりて産むのである暫らく見玉ふなと申す程に火遠理命は其申せし言葉を奇しと思ひ窺に其産殿を伺へば人體と成るべき百の物質元素となり之を取集めて人界に生れ出る用意をなし地に伏し力を盡して御子を自分の手で造

して設くる所あり、剛にして施す所有り弱にして用ゆる所あり、彊にして加ふる所あるの天の（樞）機を伺ひ、産殿を造り其の産殿末だ設け聚まらざるに、御身腹忍び難くなり玉ひし故に産殿に入り玉ひ、こゝに將に産まんとし玉ふに方り、其日子火遠理命に白して曰く凡そ佗る故郷の人は、産む時になれば本の故郷（カマレ）の形になりて産むなる故に、妾も本の身になりて生なり、願はくは妾を見る勿れと、火遠理命こゝに其の言葉を奇やしと思ひ玉ひ、竊に其産む所を伺へば、物質の幾多を抽き出し、百藥和合し現世に近き（人體ノ元素ヲ澤山ニイロイロアハセ出テ世中ニ生レツル）

り上げ自得として居れますを見て火遠理命逃げ玉へば豐玉毘賣は其見られしことを耻となし御子を人界に備へ置き神の世界へ歸り玉ふ豐玉毘賣の曰く妾は常に神の道を辿りて往來せんと思ひしに吾が子を産む形を見られしこと耻しければ神界と人界の通路を塞ぎて又通はすと申します偖て此御子は日本帝室の玉體の始めて火遠理命も後ちに人體を受けさせ玉ふと雖も此御子の宿られし後ちの事でありますから其玉體の血統は傳はらず只此御子鵜葺草葺不合

移る身となり、地に伏し力を盡くし、兒を手づから行ひて自得たり卽ち見畏みて遁げ退き玉へば、豐玉毘賣命其の伺ひ見られし事を知り玉ひ、御心に恥しと思召して、其御子を生み置き玉ひ、妾は常に天地の道を通りて往來せんと欲ひしを、吾が形を伺ひ見玉ひしが甚だ恥かしき事と白して、卽ち天地の蒲坂身熱の坂を、塞ぎて返り入りませり、是を以て產まれませる御子の名を天津日高日子波限鵜葺草葺不合命と謂なり。

神理ニヨリ生レ出デ死シ隱ル、

命の御血統は後の世まで連綿として傳るのであります

然後者雖レ恨二其伺情一不レ忍二戀心一因治養其御子一之緣附二其弟玉依毘賣一而獻レ歌之其歌曰阿加陀麻波。袁佐閇比迦禮杼。斯良多麻能。岐美何余曾比斯。多布斗久阿理祁理。爾其比古遲三字以レ音答歌曰意岐都登理。加毛度久期麻邇。和賀韋泥斯。伊毛波和須禮士。余能許登碁登邇故日子穗穗手見命者坐二高千穗宮一伍佰捌拾歲一御陵者卽在二其高千穗山之西一也。

副話第九十二席　豐玉毘賣と火遠理命の御歌

豐玉毘賣と火遠理命の御歌

豐玉毘賣其產殿を伺ひ見しことを恨み玉ふと雖も夫を戀しく思ひ且つ御子を導き養ふ緣に依りて妹玉依毘賣に歌を持たせて人界に出でしめ玉ひたり其歌の上の句に曰く人宿陀に續く神の敎への大德を成して勢ひよき法と合せば禮儀長じ斯れ多樂人の續く技能である下の句に曰く岐の美なるは何ぞ立派な容である澤山の人を世に布き天の道を柱ふるは此世の理なり多くの人に對す

然る後は其伺ひ見たる情を恨むと雖も心の戀しきに忍びず其御子を治め養ふの縁に因りて其妹玉依毘賣に歌を附けて獻りたり其歌に曰く人宿の邂逅は陀に續き神の敎の長き衣を佐け盛なる貌の則方に邂逅して禮儀を長ぜしめ斯く良き衆多の續く能技の岐り何ぞ余り曾なる則方なり衆多人を布き北方南方の星群を柱ふるは人宿の理なり衆多の理なりと其夫火遠理命歌ふて曰く意に岐り都にして衆を成熟す理は益々桑麻五穀の法を久しく續かして世に近づき移り其和を賀び韋の泥は世界萬有の理なり火遠理命其御返歌の上の句に曰く意に岐り都にして衆人を成すの理は益々桑麻五穀の稔る法を續かして此世に近寄り和化の賀びは韋の泥にあり下の句に曰く世界に有らゆる桑麻五穀を育てゝ神の敎へに合せ禮儀の士を須ゐ余は能く許つて衆人を成し陰陽の衆人を作る業を行ひ人の世に近寄るなりと歌ひ玉へり而して火遠理命は高千穗の宮に在世實に五百八十年であつたと申します

桑麻五穀を育つる神の敎に和し禮儀の士を須ゆ余は能く許つて衆を成熟し白黑の衆を成熟し業に進み世に近づき移ると火遠理命は高千穗の宮に坐ます五百八十年御陵は高千穗山の西方に在るなり。

跳はのかるなり波とは波汲の意にて神の敎なり穗とは禾の總稱にて民生るの初德なり常とは恒なり久なり

是津津日高日子波限建鵜葺草葺不合命娶二其姨玉依毘賣命一生御子名五瀨命次稲氷命次御毛沼命次若御毛沼命亦名豐御毛沼命亦名神倭伊波禮毘古命四柱故御毛沼命者跳二波穗一渡坐二于常世國一稲氷命者爲二妣

副話第九十三席　神武天皇御兄弟四神あり

神武天皇の御父上鵜葺草葺不合命は母の遣し玉へる玉依毘賣に終始副ひ玉ひ五瀨命稲氷命御毛沼命及び神武天皇の四人の御子を生み玉

國に而入に坐海原に也。

神武天皇御兄弟は四神あり

御毛沼の神は、神の敎の民生るの初德を遁れて、恒久の神世界に渡り玉ふ、稻氷命はなき母の國天地の大原へ入り玉ひしなり。

世ノ中ノモト

へり常世國も妣國も皆幽なる神界を云ふのであります偖て本書は上中下と三卷續きですが中下の二卷は歷史上水戸古學派などが悉しく述べてありますから私しは上卷のみで筆を止めます次第であります

附記

本著は古事記上卷の講義にして猶中下の兩卷あるもこれは　神武天皇以降にて世に精密なる著書少しとせず因つて筆を止むる所以なり。

大正十年六月十二日印刷
大正十年六月十五日發行

定價金壹圓

福井縣足羽郡下宇坂村奈良瀨第七號三番地
編輯並著作兼發行者　美濃部伴郎

東京市小石川區上富坂町十一番地
發行支所　菊富士館內

東京市京橋區弓町二十五番地
印刷者　高橋郁

東京市京橋區弓町二十五番地
印刷所　三協印刷株式會社

3141

324
646

終